
アイ・エス

仮面ライダーマンティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイ・エス

【Nコード】

N0563Y

【作者名】

仮面ライダーマンティス

【あらすじ】

女性にしか使えない筈の最強兵器インフィニット・ストラトス（略称IS）に何故か……というか父親のやらかした珍事によって乗れるようになってしまった佐藤洋はその操縦技術を学ぶためにIS学園へ入学することに！？

第3どころかアンティークとすら揶揄される第1世代ISに乗り、無限の空を駆け抜ける！

後に 変態 の2つ名を轟かすか1匹の狼の伝説がここに！

第1話 強くてハダカでヤバい奴！？（前書き）

多分大多数であろうはじめましての方ははじめまして、とある投稿サイトで書かせて貰いましたがこの度、本サイトで改めてデビュー致しました仮面ライダーマンティスと申します。

最初はオリジナル作品でデビューしようと考えてましたが中々に苦戦し、ちよつと息抜きに書いた小説を投稿させて貰いました。かなりアホな作品ですが、笑っていただければ幸いです。

第1話 強くてハダカでヤバい奴！？

第1話 強くてハダカのヤバい奴

誰得というネットスラング 所謂ネット隠語が存在する。

これは『一体だれが得するんだよ？』という言葉の略で、余りに意味不明で無価値な為、それを見た者が理解に苦しんだ際、或いは呆気にとられた時口にするセリフであり、今現在、僕こと“佐藤 洋”が置かれている状況がまさにそうだと言えよう。

『悪いなあ、脱いでもろおて』

そう口にしながら脱ぎたての、まだほんのり温もりが残った僕の制服一式を探る屈強そうな警備員のおっちゃん。彼は明日から僕が通う事になる。この国家直営・世界唯一の『IS学園』の警備を務める番人であり、未来のエリート在不審者の魔の手から守るに足る。非常に遅い もうなんていうの？丸太見たいな足と金属見たいな腕をしたスキンヘッドの中年男性だ。

その彼に学園内では目立つ余所の制服を着用していた僕は目を付けられ、こうして机とパイプ椅子しかない狭い詰め所に連行され、荷物を調べられていたのだ。

ホント、1話から誰得な展開過ぎる状況と言えよう。

「ふむ、取り合えず怪しい物はない、と……。ほんまにすまんなあ、ホレ、ここって世界中のエリートが通う学校やろ？ 色んな怪

しい奴ひつきりなしに訪ねて来るもんやから兄ちゃんみたいな子供でも、一応用心させてもらっとるんや。分かるやる？」

「はぁ……」

一頻り手荷物を確認した後に最もらしい事をかたる警備のおっちゃんに僕は曖昧に返事をする。これから通う事になる学校の警備を担う人間の言葉としてなんとも頼もしい限りだが、如何せん現状で僕はまだ『護られる側』ではなく『排除する側』として認識されている事と、依然として制服を返してくれてない。狭い詰め所で屈強な中年と2人きり、パンツ一丁で相対しているという大変ハードな状況が僕をたまらなく不安にさせる。一刻も早くここから出たくてしようがない。

「さて……、兄ちゃんもこないな狭い部屋にいるのは嫌やる？ せやからなあ、正直に全部話してくれへんかなあ。悪いようにはせえへん。ホレ、おっちゃん目え見てみ。これが嘘付くように見えるか？」

嘘付く人間の常套句の様な言葉を口にしながら、変わらず疑心に満ちた視線を僕に向けるおっちゃん。案の定、僕のこれまでの説明なんかこれっぽっちも信じちゃいない。

「いや、ですから、その……さっきもいいましたけど僕は今日からこの学校にですな」

「転入する事になったって話やる？ 勿論学園側からのお達しも聞いとるで？ けど俺が聞いてたのは“操縦科”の生徒さんや。兄ちゃん男やる？ それなのに整備課ならともかく操縦科の手続き書類とかって可笑しいやん？ “IS”って男には使えへんやん？」

あくまで僕を不審者と決めつけつつも、一応筋の通った事を口にするおっちゃん。

そうなのだ。僕がこれから通う事になるこの『IS学園』は、10年前に開発され、世界の軍事バランスを崩壊させた“女性にしか扱えない”最強の機動兵器 インフィニット・ストラトス 通称ISの操縦並びに開発・整備技術を学ぶ為に設立された養成機関なのだ。

その特性上、生徒の男女比は当然の様に1：4と圧倒的に女子が多く。ましてやISの製作や整備技能を学ぶ整備科ならともかく、僕が通う事になる操縦科などは当然、女子率100%であるのが然るべき状況なのだ。基本的に（・）は（・）

しかし何事にも、例外というものはある。

「だからそれもさつき説明した様に、俺も（・）同じ（・・）なん（・・）です（・・）よ！ 今年に入学した例の世界初の男子みたいに！！」

「織斑一夏くんの事やる？ おるんやな」最近。あいつのニュースが出て以来。自分もそうやないかと錯覚する奴。ヒロシお前クスリとかやつとるんやないのか？ あーいうのはアカンで？ 本人だけやのうと周りの人間も不幸にするから」

ダメだこのおっちゃん。早く何とかしないと！

最早1も2もなく僕の事を不審者かヤク中と決めつけて疑っていない。そりゃ確かに僕はその『世界初の男性操縦者』である織斑君みたいに騒がれてはいない……というか“ちよつと特殊な事情”があ

る為、余り目立てる立場にないから嘘くさく感じるのは無理もないが、だからって正規の転入書類を見せて尚、『良く出来た偽装書類』と判断するのはどうかと思う。

それとさっきからヒロシヒロシ言ってるけど僕の名前は洋と書いて“ヨウ”だ。

とにかくこのおっちゃん。まるで人の話なんか聞いちゃいない。

「いや、おっちゃんヒロシの気持ちもよう分かるで？ なんとってここは、将来世界に羽ばたくエリート女子高生が通う女の園、可愛いくてええ娘がたくさんおる。男から見たら楽園と言ってもいいところや。けどそういう所で純粹培養された娘こそ、変な虫が近づいて来た時に抗う術を知らへんちゆう事も間々ある。せやからおっちゃん、そんな娘を命懸けで護る義務があるんや。……そしたらまあ案の定、ヒロシみたいな絵に描いた様な不審者の登場や」

ふう。と落胆を思わせる溜息をしながら、おっちゃんは机の中から何故か懐中電灯を取り出し、分解して中から単一電池を抜き取り、立ち上がる。

「あ、あの……色々ご立派なご高説はいいんだけど……それって結局全部、おっちゃんの勘なのでは……？」

僕の後ろに回って逞しい腕でヘッドロックするように僕の首を抑え、脂ぎった頬を擦りつけてくる。鳥肌がたった。

「おっちゃんの勘はなあ。ものごっつよう当たるねん。間違はなくヒロシ、お前はクロヤ。このまま兄ちゃんを本部なり警察になり突き出してもええんやけど、それやと見る目の無い連中が用意してき

た二セ書類に騙されて、ヒロシという狼を迂闊にも学園に解き放ちかねへん。せやからまずは洗いざらい告白して貰えへんとなあ

というわけで1本、いってみようか？」

単一電池を握り締めながら、この世の終わりかと思う様な恐ろしい事口にする。

「い、1本ってその、ク、クスリか何かですか？ あの夜の街とかで売ってるヤツ！ いや、ああいうのはいいと思うなあ。精神壊しちゃうし、周りの人の人生も……ね？」

「ヒロシはホンマにオモロイなあ、この状況でそんなん言えるなんて大したタマやで？ けど許さへん」

にんまりと脂ギッシュな笑顔を作るおっちゃんは、僕の首をロックする腕に一層の力を込める。

「ちょっ……、こんなのおかしいじゃないですか！ 僕は全部ちゃんと説明しましたし、持ち物だって言われるがままに……！ こんなの犯罪だ！ 訴えてやる！」

「よー考えてみいや、ケツに単一乾電池でファイト一発やで？ 突っ込まれたあ言うて警察駆け込むわけにもいかんやん？ それとも、恥晒すの覚悟の上で行けるか兄ちゃん？」

な、何と言う計算し尽くされた策略！ この男天才か！？

「大人しゅうせいや、正直に全部言うて反省せん兄ちゃんが悪いねんで？」

「……もしもあなたの予想通りのことを言って、反省していたらどうしました？」

「もちろん単一乾電池に決まってるやん。がはっはっはっ！」

結局一緒じゃないか！？

マ、マズイ……！ このままでは連載第1話目から僕（主人公）の肛門括約筋が大活躍するといつとんでもなくハードな展開に！

でもって、その体験の果てに目覚めた僕は

いやゝ、実は僕、ロボットなんですよ、お腹減ったなあ、ああ、こんなところに単一乾電池、しかもポリウム満点のアルカリがあるじゃないか！ いただきまーす……こうしてお尻にある穴……バツテリーチャージ！

最悪だっ！！

マズイ、マズイぞ！

折角それまでの経緯はどうあれ、女子率80%以上の樂園エデンに入学してきたというのに、いきなりそんなマニアックなルートに突入なんてあり得無さ過ぎる！

そうなる前に何とかせねば……！

「あつ！ むここの茂みで織斑君と女子があられもない恰好で……！？」

「なんやて！？」

一瞬の隙をつき、僕はおっちゃんの太くて逞しい腕から逃れると財

布などが入った段ボールを手に取り、真っ直ぐ窓を目指す。開けている暇はない。突っ込むしかない。多少肌が切れるかもしれないが、肛門括約筋が切れるより遥かにマシだ！ 迷ってるひまなんかない。

「イェアアアアア！」

雄叫びと共に僕は窓へ突っ込む。砕け散るガラス。肌に感じる外の空気が最高に気持ち良く。アスファルトの上に転がった際、小石が痛かったが、それ以上に自由を得た悦びに満ち溢れていた。アイ・アム・フリー！

ヒロシ待てえ！ と相変わらず人の名前を間違えたおっちゃんが怒声をあげて追いかけてくるが、無論待つ筈が無い。ふり返ることすらせず走り出す。

周囲の女子生徒から悲鳴が上がる。僕の勇ましさと露になった肉体美に失禁でもしたのかもしれないが、今はそんな事気にしてられない。悲鳴を上げたいのはこっちなのだ。

僕は走る。自らの大切なモノ

肛門の純潔を護る為に！

IS学園1年1組担任にして、学年主任、1年の女子寮長、更には非常時の警備に関する全権を与えられた織斑千冬おりむらちふゆの毎日是非常に多忙だ。多くの肩書きには権利や権威と共に相応以上に責任と義務が付随する。

顧問を務める茶道部が休みで顔を出す手間がないこの日にしたって、クラス代表対抗戦の打ち合わせやアリーナの使用申請、程なく始ま

る訓練機を用いての実践演習のカリキュラム作成などやる事には事欠かない。

（全く……他の先生方は私をサイボーグか何かと勘違いでもしているのか？）

学生時代に蔑称としてつまらない男子に言われ、自分に対し半ば盲目的な信仰を抱く女子生徒も敬称として自分の事をそう呼ぶ『鉄の女』の字に思いを馳せながら、小さく溜息を洩らす千冬。

今の自分の仕事に不満があるわけではないし、暇を持て余すのよりは多忙な方が性にあってるが、それもなんだかねで適当な休息が合ってこそ、真にくつろげる場所があつてこそなのだ。

その点で行くと、数か月前より分かつていた事とは言え、今年から入学してきた弟が自身の寮長を務める1年女子寮に入ってきてしまった事が実に惜しまれる。

何せ折角家に帰っても、家事を完璧にこなし、明日着て行くスーツまでこさえてくれ、且つマッサージまでしてくれる弟がいないのは殆ど意味がない。立場を弁えて1人の生徒として扱わなければいけないのも、正直、疲れる。

更にはその弟が、最近女性関係でかなりアレな事になっているのも、千冬としては頭痛の種であつた。

）
）

そんな彼女の携帯に、飾り気のない初期設定のままの着信音が鳴る。

「もしもし私だ。……………何、侵入者だと？ 警備は何をして

ハッ？ パンツ一丁？ ブービートラップ？ 報告は迅速かつ正確にといつも言っているだろう！？」

ただでさえストレスが溜まり気味な所で聞かされた不鮮明で有りながら『学園に不審者突入』という危険な報を受け、思わず声を少し荒げる千冬。その叱りを受け、落ち着きを取り戻した校内のセキュリティチームオペレーターは、数少ない情報をまとめ、彼女に報告する。

時間は本日15時20分頃、“操縦科への転入生を自称する少年”を不審に思った校門警備員が呼び止め、詰め所に連行し手荷物検査をしている最中、少年はパンツ1枚と衣服を除く全装備を奪還し詰所の窓から脱走。一報を受けたセキュリティチームがコンディションレベルイエローを発動し、捕獲に向かった所、半裸の少年は信じ難い身体能力と逃走しながら仕掛けた即興のブービートラップを駆使し、20名近く常勤する警備隊員の3名を行動不能にし、依然校内を逃走中

という旨であった。

「門前のあの男から逃げ切ったというのか？」

ひとしきり聞いた上でまず1番驚いた点について疑問を口にする千冬。彼女の認識の中で、これは中々に厄介な事態だという事になった。

何せあの筋肉質な警備員は、その女子生徒や自分を含む若い教員を見る目付きがいかがい点、弟に対し『己リア充！ 何時かお前の肛門にキツツイのかましたるさかい覚悟せいや……』と単一乾電池を弄くりながら恨み言を漏らすなど変態行為に目を瞑れば、恐ろしく強靱な守護者であると言えるからだ。

そんな男が容易く突破を許したばかりか、さらには民間から出向した彼とは異なり、学園内の防衛を任された全員が千冬直々に鍛え上げた経験値も豊かな女性ばかりで構成された　IS学園セキュリティチーム　の精鋭たちが満足な装備を持つていないであろうたった1人の少年に苦戦を強いられるなど、育成機関であると同時に各国のパワーバランスに影響をもたらす最新鋭機やその操縦者が多数在学する国際機関としてはあつてはならない由々しき事態だ。「もしや亡国機業の工作員か？」という危惧さえ浮かぶ。いずれにせよ迅速に解決すべき問題だ。

「あつ、こちらにいらつしゃったんですか織斑先生。明日から転入してくる例の2人目の男子生徒の件なのですが」

「すまない山田先生、その件は君に任せる。私はこれからセキュリティ本部で侵入者の捕獲を指揮しなければならない。　フン、何処の国の特殊工作員だか知らないが、この私が護る学園領地に土足で踏み言つた事、存分に公開させてやろう」

「は、はあ……」

優秀な指揮官とは物ごとに置いて常に最悪の事態を想定して動く慎重さと、重い立った事を即座に行う決断力と行動力が求められる。オペレーターの報告と、切羽詰まった気持ちにじみ出ている彼女の声を聞いた千冬は、相手を考えうる最悪の敵として想定し、同時に自分に対する宣戦布告と見なし、まだ見ぬ侵入者に対し、蛮勇を褒めながら、全力を持って、これを駆逐する意思を固めた。

正直、いいうさ晴らしにもなる。

「岸田、私だ。侵入者が使用したブービートラップの特徴を教えろ。私にも少し知識がある　　ふむ、そうか。よし、今から私の指示通りに部隊を動かし、侵入者をB-18区画へ追い込め……ああ、そうだ。無理して捉え様とせず、常に最低でもツーマンセルで動くように厳命。敵は素人ではない。それから全校生徒への外出禁止を呼び掛ける」

さながら女將軍という言葉がぴったりなほど堂々とした立ち居振る舞いで電話越しに現状の指揮官に指示を出し、足を一路司令部へと早歩きで進める千冬。その顔には、不機嫌さや緊迫感とは別に、僅かばかりの高揚感も窺えていた。

「くそっ！どうなっている！？　奴ら急に動きが良くなったぞ？」

アリーナと呼ばれるISの実践訓練を行うドームと校舎を繋ぐ通路にあるちよつとした林の中の茂みで僕は息を殺し、身を屈め、先程から急速に統率がとれてきた敵部隊の追撃をかわそうと試みてはいるが、恐らく今の彼女たち相手では難しいだろう。

逃走序盤、僕のトランク스에靴下+スニーカーという最高にセクシヤルハラスメントなコーデイナーに頬を紅潮させながらも職務に従事して容赦なく訓練用硬化ゴム弾を装填したハンドガンで狙いに来た彼女たちは当初、個々の身体能力こそ確かなものの、皆が皆、自分1人で僕を捉える事も容易と考えての事だろうがバラバラに行動し、故に罠にかける事や、うまく誘導して同士打ちを誘発させる事も出来たが、ある時を境に闇雲な攻勢を止め、引くべき時は引き、

攻める時も必要最低限の攻撃に留め、確実にこちらの体力や装備を削いでくる消耗戦に変えてきたのだ。
といってもトランクスだけだが

既に親父が絡んだトラウマ物の事件により小学3年生の時点で、自衛隊新人隊員と同等の体力を有する事になった強靱な肉体を誇る僕の体力も限界に達して来ており、これまで猛攻を耐え抜いてきたトランクスもあちこち破れ、これまた大変な事になってきていた。

僕の体力が尽きて捕まるのが先か、トランクスが限界に達し、僕が全裸+靴下&スニーカーという最高にセクシャルハラスメントな痴態を晒すのが先か……いずれにせよ破滅は時間の問題であった。

こうなってくると、向こう側には優れた指揮官がおり、ただの高校生である僕を某国の特殊工作員か何かと勘違いしてガチで殺りにかかってきていると考えるのが自然だろう。

全く、何がIS学園だ女の園だ！ やはり楽園と称される所には口くなしがないのだろう。例えば都心に存在する化け物どものあのワンダーラン……いや、この話はいい。

こうなってくると当初考えていた。身の安全を確保した段階で学園に通う従姉に服を持って迎えに来て貰い、同伴で職員室まで行って事態を収拾するという手段も難しくなってくる。何せあの優秀な指揮官の事だ。携帯の会話など容易く傍受し、こちらの位置を割り出すであろう。

いつそ白旗を上げ投降し、取調室で正直に話すか？
いや、正規のルートを取りながら単一乾電池を肛門に突っ込もうとする警備員のいる所だぞここは？ 国際法に基づいた捕虜の人権など望みようがない。

こうなればもう、徹底的に逃げおおせながら従姉を見つけ、彼女にすがるしかない。

その為にはまずこの包囲網を突破せねば！ 意を決し、僕はランボ―もビックリなワンマンアーミーとして、孤独な戦場へと駆け出して行く。

「まさかこれ程とはな……」

外部からの侵入などの有事の際、学園の全てを統括する司令部なるセキュリティールームに到着し、司令官の席に着いた千冬は、報告に合った謎の侵入者（警備員の証言により以下コードネームH I R O S H Iと呼称）能力に驚きを隠せないでいた。

その強靱な体力や戦術に対する知識、ブービートラップ技術などは元より、恐るべきはその精神的な強さである。敵陣の真ただ中、着実に追い込まれ、満足な装備も余力もなく。普通なら降伏か自決の二択を迫られる極限の状況下の中で彼は事もあるうに正面突破を仕掛けてきたのだ。

更にその過程で、飛び掛かった隊員の1人がそのトランクスを掴んだ際、彼は何の躊躇もなくそれを破り捨て、靴下とスニーカー、更に左手首にデジタル腕時計と言う最早新時代を彷彿させる恰好になって尚、全力で走り切り、女子率100%の部隊は男子の全裸に興味と羞恥を抱いた結果、動きが著しく悪くなった部隊の隙間を抜いたのだ。

目的遂行の為ならば自らの尊厳もかなぐり捨ててその精神と、決し

て諦めぬ不屈の心、正に完成された戦士ソルジャーと言える存在　　実際
には只の変態でしかないのだが、とにかく千冬の中ではそう格付け
されていた。

「……現場にISの使用を許可すると伝える」

「しよ、正気ですか織斑先生！？　作業員1人にISの使用なんて
前例が……」

「それを言うならそのたった1人の作業員に学園がここまで侵入を
許した前例すらそもそもにない。政府への言い訳は後で幾らでも拵
える！　早くしろ」

「あのー、織斑先生……」

通常のマニユアルから逸脱した命令に戸惑いを見せるオペレーター
に声を少しばかり荒げる千冬。そんな彼女の機嫌を窺いながら、緑
色の髪の毛と小柄な体格に対しやたらと目立つ立派な乳房が印象的
な童顔の女性“山田真耶”やまだまやが恐る恐る声をかける。

本当は今の様な状態の千冬には声をかけたくないのだが、職務上、
立場上、どうしても彼女に伝えなければならぬ用件があったのだ。

「山田先生、今は非常事態だと言った筈だ。通常の業務に関する事
なら後に……」

「い、いえ、それがそういう訳にもいかないといえますか……先生
たちが今捕獲しようとしている侵入者さんが、先程お話しした転校
生の佐藤洋君なんです」

まるで3時間並んだ拳句『商品が購入できるのはここまでです』

とギリギリであぶれた人にいうような沈痛な面持ちで千冬に真実を告げる真耶。

すると彼女は背を向けたまましばし沈黙し、ギギギ……とサビかけた玩具の様な音を立て、「なん……だと……？」と週刊連載の少年漫画の引きで使われそうな表情で振りむいた。

侵入者、確保完了しました！ 現在訓練用の模擬弾を受け昏倒中。これより本部へ護送します。 ふえあ……そ、それよりとりあえず何かはかせましょうよ先輩いゝこのままじゃその……。

フフ、この程度で照れるなんて可愛いわね宮崎ってば

一方、司令部のメインモニターでは指揮官の早すぎた最終手段の決行によって出撃した3機のISに文字通り裸一貫で立ち向かった結果、ボロ雑巾の様になった全裸の少年の姿が映し出されていた。

第1話 強くてハダカでヤバい奴！？（後書き）

基本的には息抜き投稿なので更新は遅いと思います（汗）

第2話 ルームメイトは金髪（ブロンド）の麗人（前書き）

感想が嬉しくてストックもないのに書き上げて即投稿（笑）

今回のお話で皆大好きな金髪のあの娘が登場！

IS要素は3話に繰り越し……

第2話 ルームメイトは金髪（ブロンド）の麗人

第2話 ルームメイトは金髪^{ブロンド}の麗人

僕は、ひよつとしたら知らず知らずの内に大人の階段を昇り、魔法使いになる権利を放棄してしまったのかもしれない。

それも、スーツの良く似合う。若いキャリアウーマンっぽい感じの美人さんと……だ。

今、僕は限りなく生まれた時のそれと近い恰好で、というかぶつちやけ見覚えのない真新しいトランクスー丁で、横長のソファに座っている。周囲はガラス製のテーブルを中心に向かい合う様にソファが置かれ、周囲にはゆったりとしたスペースが取られつつも観葉植物や絵画などが置かれ、一流商社の応接室……といった印象のある部屋だ。

そして正面には夕日が差し込む窓に背を預ける彼女がいた……。

お、落ち着けヨー・サトウ。1番いい所が記憶の中に無いぞ。もしやあまりにも衝撃的な展開すぎて記憶が飛んだか？ そんな昔の口ブレのセーブデータみたいな真似があつてたまるか！

大丈夫、きっと僕の脳は大丈夫だ。落ち着いて順に思い出すんだ。

……まず、僕は目を覚ました。んで、身体を起こしたらこの部屋でトランクスー丁でいたわけだ。……“ある程度のこと”なら大体できそうなのこの部屋に。

そんなキョロキョロしている僕に気が付いたお姉さんが、こちらに顔を向ける。意思の強そうな目つきが印象的な女性、なまじ容姿が完璧な分、ある種の迫力の様なものすら感じる美人さんだ。

そして訳も分からず混乱している僕に対して彼女は言ったのだ。「

気が着いたか？ 思っていたより早かったな」……と、まあなんつか、男としては実に残念な事を言われたわけだ。

……その前は？ えーっと、何だろう、記憶が混乱してはつきりと思いつけない。確か転校の手続きの為にIS学園に訪れてやたらにかつい警備員のオツチャンに詰め所に連行されて服を脱がされて……ダメだ。その後の記憶がまるで思い出せない！ 一体どういう過程を経て狭い部屋でおちゃん相手に脱いだ僕が、こんな美人のお姉様とアレがコレしてそうなったのか、まるで過程が想像できない。もしかこの美人こそあのおちゃんの本体であり、魔女が何かの呪いであんな姿にされた所、通りかかった僕とこう、キスをした事で呪いが解けたというファンタスティックな要素でも取り入れなければ説明が出来ない。

つまり……… 1番肝心な部分思い出せないという事だ！
ちくしょう！ 残念過ぎるにもほどがあるぞ！？ あれだ、宝物にしていた初恋の人、広部さんとのツーショット写真を従姉の手で落書きされた時くらいの残念さだ！

それにそんなホニヤラパーな関係になって置きながら、彼女の名前すら知らないというのはかなり問題だ。……その、責任とかけじめ的な意味でも。とにかく思い出さなければならぬ。彼女の名前や素性、出会った経緯、そして何より行った行為の詳細を！

………ダメだ！ 思い出せない！！

ああ、ああ、憎い！ 記憶がないのが憎い！ 加えて失われた記憶を無意識に妄想で補完しようとしている自分のクリエイティブな脳が嫌だ！ 加えて思い出そうとする過程で彼女の主に首から下を凝視した結果、一戦終えたばかりだというのに欲情し、股間を膨らま

している自分が嫌だ!!

……いや、だが、待てよ……。さっきの彼女の言葉　思ったより早かったを考えれば……。このままではいけないのではないか……。？このまま引き下がるべきか？　……。否、早さで失望させてしまった分は、回数でカバーすれば結果としてOKなのではないか？　若さに溢れる今の僕ならば問題は……。

よし、思い立ったが吉日とばかりに己に気合いを入れつつ、僕はソファから立ち

「佐藤起きたー？」

……僕はそのままお行儀よくソファに座り直した。やや前屈み気味に。

平然と扉を開けて入ってきたのは……。白を基調としたIS学園の制服に身を包んだ僕の従姉“著莪^{しゃが}あやめ”だった。イタリア人の母親の血を受け継いだ金髪をボサボサにし、碧眼に眼鏡をかけた。容姿だけなら文句のつけようのない美人。

そして僕にとつて、同じ日に同じ病院で生を受け、双子の様に育った言つなれば相方の様な存在だ。しかしそんな彼女が一体何の用でここに？　これから僕は彼女の期待に応えれべき再戦に臨まなければならぬというのに……。

「ああ、著莪か。丁度いい所で来た。どうもこの男、目を覚ましたのはいいが自分の現状を把握しきれていないらしい。身内のお前から説明してやってくれないか？」

「えっ、マジですか！？　うわー、あんだだけ派手に暴れといて覚えてないって佐藤お前……」

僕が著莪のタイミングの悪さに不満を抱いているのとは逆に、美人さんは逆にどこか安堵したように彼女を迎え入れ、僕の隣に座らせる。何がおかしいのかケラケラと笑う彼女はそのまま、僕の記憶の空白の（^{ミミ}ング）部分^{リング}に何があったのかを愉快そうに話し始め、それを聞く内に、僕は芋づる式に先程まで展開されていた激戦の記憶を思い出すと同時に、戦闘後半、的確な指揮で僕を苦しめた司令官が目の前の美人さん改め織斑千冬さんであるという事実^{ミミ}に恐怖した。あの噂に名高いブリュンヒルデ（世界最強の女性）に僕はあろう事かシチュエーションに紛らわしい物があつたとはいえ、男女のエトセトラを行おうとしたなんて……一体どこの自殺志願者だ！？

「その顔から察すると一通り思い出したようだな。……その、なんだ。まずは落ち着け……」

アレ、気の所為だろうか？ 僕の方に顔を向けた途端、織斑先生の顔に微妙な紅潮が……ハッ、もしか学園側が繰り出した数々の攻撃を勇ましく鮮やかにかわしてきた僕の姿をモニター越しに観て一目惚れ
おいおいジョニーなんてこつたい。学園について早々僕って奴は早速フラグを立てちまいがった。それも女性教師なんて言う1週目の攻略がかなり難しそうなルートを……いや、待て。それにしては妙だ。視線が僕の顔より気持ち下を向いているしそもそも『落ち着け』の意味が
ハウッ！

「で、佐藤。どうしてアンタはこの状況でこんな所を腫らしてるのかな？ ん？」

そんな僕の疑問は臀部より下にあるその……その、なんだ。パンツ越しに膨らむアレをガッチリホルドする著莪の手によって解消される。そうだ。すっかり忘れていた。僕のアソコはつい先程までの勘違いですっかり解放状態になっていたのだ。

するとナニ……いや、何か？ 織斑先生が妙に顔を背けて言葉に詰まっていたのは、僕の股間の全開っぷりを見てという事か！？
もしかこの女性^{ひと}、存外に男に対し免疫がないのか？ 女尊男卑社会になって久しい昨今、そういう女性も増えてきていると言うが彼女の様なクールビューティと呼べるような人まで……マ、マズイ！
織斑先生のギャップに興奮した僕のアレが鎮まるところかますます勇ましく
！？

「うわあ、ひでえ！ この期に及んでまだお前……アハハハッ！」
そんな僕のナニの変化に目ざとく気がついた著莪が楽しそうにニギニギと弄る。久しぶりに会ってお前、何と言う事を……！

同じ病院で同じ日に生まれた著莪とは、家が200mも離れていない近所同士と言う事もあって従姉弟というより双子の姉弟同然に育った為、昔からじゃれあい日常茶飯事だったし、流石に思春期に入ってから一緒に風呂に入る事はなくなったが、徹夜でレトロゲームに没頭し、同じベッドで寝る事なんかも中学時代まで日常的にあった。加えて彼女自身、恥じらいというのが微妙に欠けているのか、よく僕の親父と共謀して僕の部屋に巧妙に隠してあるエロ本を発掘しては晒しものにするなど非常に性質の悪いイタズラを頻発してきたのだ。

この社会情勢の中、良くも悪くも男女を意識せずに接してくる彼女の姿勢は美徳なのかもしれないが、正直1番の被害に遭う身として勘弁してほしい。というか織斑先生も僕らのやり取りに明らかに困っているし、とりあえず手を離してほしい。

「……著莪、お前たちの関係については深く詮索するつもりはない。しかしそういう事は2人きりの時にやれ」

ああ、織斑先生がとても居心地悪そうに……しかも絶対僕らの関係を誤解している。

その後、著莪が「ハイ」と口にしながら僕のアレを解放。僅かな時間で人として、男として、余りにも多くの大事なモノを失った気がするが、取り合えず僕は晴れて転入生として認められる形になったのだ。

…… たったそれだけの事にどれだく苦勞と犠牲を払っているんだ。

「ハイ。こちらが今日から佐藤君が暮らす事になるIS学園男子寮になります。操縦者科の校舎からは少し離れてますから、遅刻しない様にしてくださいね？」

「ハア……」

あの後、織斑先生が持ってきた書類に必要な事項を書き込み、僕は改めて入学手続きを済ませた後、小柄で童顔の割に大変良い乳房をお持ちと言う素敵な先生 山田真耶先生に連れられて学園の外れにある男子寮へと案内された。

ISは基本、女性にしか扱う事が出来ないが整備や武装の開発などは当然の如く性別を問わず可能なので男子生徒も少ないが【整備課】に在籍しているのだが、これが中々に不遇を強いられている。何せ世は女尊男卑社会の真っただ中と言う事もあり、大企業や国会における女性CEO・議員の数も年々うなぎ登りであり、それに反比例して男性の扱いは悲しい事になっている時代。巷では男性が見知ら

ぬ女性に突然声を掛けられ、パシリにされる光景なんてのも珍しくもなく。男性の社会的地位は、セガの家庭用ゲーム機並に一般的には軽視されている。

それに起因するのは当然、「女性にしか操れない最強兵器」の台頭な訳だが、その最強兵器について学ぶ本校においてもその価値観は反映されているのはこの男子寮の外観を見て容易に理解できる。

流石に学園創立から数年しかたっていないだけあって、建物自体はまだ新しさが残り、作り。部屋の広さや設備、男子100%特有の男臭さも含め「平均的な学生寮」としては及第点と言えるだろう。

だが、

「こりやないって……」

「アハハ……すみません」

焦燥に狩られ漏れた僕の言葉に山田先生が苦笑を漏らす。そう、気分はまさに某セガの大ヒットアーケードゲームのコンシューマー版をプレイした時のそれそのもの。というのも入学案内パンフレットやTVの特集で取材された時の超豪華リゾートホテルも真っ青な絢爛豪華な女子寮に比べ、あまりにも普通なのだ。

最強兵器の未来の乗り手。世界中の国を代表するエリートを育てる国立IS学園はその性質上、世界中の操縦者候補生に安全と経済的負担の軽減から寮生活を強いる事になるのだが、そんな彼女たちが快適な学園生活を過ごせるようにする為にベラボーな国家予算を費やしており、学園敷地内は訓練用アリーナから校舎内施設から娯楽施設に至るまで高級レジャー施設並に充実しており、プライベートの象徴である寮もまた、二人一組であてがわれる部屋は高級ホテル

のそれと何ら遜色がない。また大浴場は金すら取れる級の作りであり、朝夕の出る食堂はレストランの域だ。

一方こちらは典型的な学生寮、生徒の少なさを考慮して各自個室があてがわれてるメリットはあるが、一部屋当たりの大きさは生活最低限のスペースである6畳1間、小ざっぱりしたフローリングの1ルーム。大浴場は昔の銭湯のようにシンプルで有り、食堂は平日の朝しか出ない。因みに親から振り込まれる月々の仕送りは3万なので、食費削減は今後の重要課題と言えるだろう。

また、女子寮が厳重なセキュリティが施されている学園敷地内の中にあっては、男子寮は学園の外れ。僕の見た所、この敷地内においては非常に防衛網の薄い作りになっていて、仮に僕がこの学園を強襲するテロリストなら真っ先に制圧される様な位置にある。

アレか、いざとなっても男子はまあ、どうなってもいいという事だろうか？ 確かに僕だって男子と女子の安全なら迷うことなく後者を取るが、それは僕が住んでない場合の話だ。

ついでに言っと校舎までの距離がkm単位で離れている為に早起きも必要される。

何て言うかも、分かり易過ぎる待遇の差であるが……まあ、それを差し引いても1人暮らしの高揚感はある。何せもうあの頻繁に命の危機が訪れる実家から あの親父から離れる事が出来たのだ。どこだって天国なのは間違いない。

そう気持ちを切り替えた僕は山田先生に爽やかなサムズアップを決めて部屋の鍵を受け取り、入室。先に贈られた荷物の詰まったダンボール3個が置かれた部屋にかばんを置いた後、食堂や浴場の利用時間や門限などの簡単な説明を受けた所で明後日からの事も説明さ

れた。どうやら僕は著莪や例の男子のいるクラスではなく3組になるとの事だ。

そうして全ての説明が終了した所でバイブにしていた携帯をチエックすると著莪からの着歴とメールがあつたのに気がついた。《9時頃お菓子持つて遊びに行くから取り合えずサターン使えるようにしとけ》との事らしい。

相変わらずだなと苦笑しつつ、とりあえず言われた通り制服や部屋着、SSや各種ソフトなど当面の生活必需品を詰めた段ボールを開けて言われた通り準備をする。

何気にもう夕食を取らないまま8時過ぎてしまっていたが、まあ今夜は彼女が持つてきてくれる菓子で腹を満たす事にしよう。

午後8時30分ISS学園女子寮

従弟の佐藤から送られた《

了解》という件名オンリーのメールをチエックした著莪は約束通り菓子とペットボトル飲料がタップリ入った袋を手に上機嫌でルームメイトに別れを告げる。

「んじゃね鈴。多分今日は佐藤んトコに泊まると思うから」

「ね、ねえ……マジで泊まるのあやめ？　だってその……男の部屋に……」

いつも通りの自然体で部屋を出ようとする著莪に対し、彼女のルームメイトにして仲の良い友人。そして中国の代表候補生にして1年2組のクラス代表である鳳^{ファン}鈴音^{リンイン}。鈴は顔を紅潮させながら彼女に尋ねる。何せ彼女はこれから男子寮に忍びこみ、本日、学園中を

騒がせた転校生である従弟の元で『一夜を過ごす』と言っただ。男女交際に人1倍の興味と怖れを抱く10代乙女としては、友人の行動に戸惑いを隠せないでいた。

しかも 相手は従弟とはいえ、全裸で学園を駆け抜ける様な変態の所に、だ。

転校してからまだ2週間程度の付き合いでこそあるが、鈴にとって著莪あやめという友人は羨望すら抱けるほど気持ちの良い女性だった。母親譲りの整った容姿やスタイルは元より、それを全く意にしない気安さ、老若男女関係なく誰とでもすぐ仲良くなれる社交性は、女性と言う立場だけで傲慢な態度を取る矮小な連中とは真逆なものを感じる。何より同学年であるにも拘らず、どこかしら大人びた印象を受けるのも魅力の1つだろう。

転校当初、その人柄からクラス代表に選ばれた著莪に対し、鈴は『私とクラス代表を変われ』とにべもなく言い、当の著莪を除くクラス中の女子から悪感情を抱かれたのだ。女尊男卑の思想こそ抱いていないが誰に対しても些か不遜な態度を取る鈴は、例えばそれでも一向に構わないと思っていた。

所詮、人なんてものは圧倒的に優秀な能力さえ見せればおのずと付いてくるもので、自分にはソレがある。だから多少の横柄な態度も然るべきものという考えだったのだ。そもそもに自分はこのクラス唯一の専用機持ち、少々来るのが遅れたくらいで代表になれないなどとい話の方がお役所仕事も甚だしいのだという考えを信じて疑わなかった。

そしてそんな彼女に対し、あやめは少し考えた後にこう言ったのだ。

『うーん……まあ、元々面倒だったから譲ってもいいけどさ、1コ条件がある。1組の奴らみたいに代表の座を懸けて勝負！ なんてのはどう?』

鈴はそれを聞いた後、最初は鼻で笑ってこそみたが、実力をクラスの連中に見せる丁度良い機会だと考え了承したのだ。

そして数日後行われたクラス代表決定戦　彼女は敗北したのだ。
試合にはなく。著莪あやめという人間の器に……

鈴の第3世代機である《^{シンロン}甲龍》に対し、あやめが選んだ機体は訓練機でフランスの大企業《デュノア社》製の第2世代ISである《ラファール》。圧倒的な性能差を前に試合は終始、鈴のペースであったにもかかわらず、結局負けたにもかかわらず、彼女は　著莪あやめは笑っていたのだ。

まるで純粋なゲームを楽しむ子供の様に、装備の差もまるで意に介さず果敢に挑み、エネルギー残量が0になるその瞬間まで決して諦めずに己の知力と体力の全てを賭けて、真っ直ぐに。

そして負けた後の第一声がこれだ。

『負けた負けた！　やっぱ強いね代表候補生は、けど次は負けねー』

と、鈴はポカンと開いた口がふさがらなかった。そして、気が付くと周囲では激しい勝負を繰り広げた両者を称賛する拍手に包まれていたのだ。健闘した著莪は勿論、機体性能差に躊躇などせず、決して手を抜かずに全力でこれに向かった鈴にも、気がつけば彼女は当初目論んでいたよりも遥かに居心地の良い形でクラスの代表になっていたのだ。

その時、鈴は著莪に尋ねた。

『アンタ最初っからこうなるって分かって試合した？』
すると彼女は

『まさか。こっちはただクラス代表の立場を賭けるだけで代表候補生や専用機と真正面から戦える機会があつたからやっただけ、勿論勝つ気でね？』

と答え

『何でそんなに強気になれるんのよ。普通無理って思うでしょうが専用機持ちの代表候補生と訓練機乗りの1年なんて……』

『だから面白いんじゃない！ トライ&エラーって知ってる？ 私アレが求められる状況って結構好きなんだよね』

と言ったのだ。

その笑顔を見て、鈴はまんまと思ってしまったのだ『ああ、イイ女ってコイツみたいなの事言っただろうな……』と

それから鈴はルームメイトという偶然も相まって、学園生活での大半の時間を著莪と過ごしてきた。放課後の部活の時以外は殆ど一緒と言っても過言ではないだろう。おかげでこの学園に来た最大の目的である想い人と別クラスになってしまったという不満も随分と軽減され、かなり楽しい学園生活を送れている訳だ。

そして、そんな彼女と一緒に話しているとセガというゲームメーカーの素晴らしさについての次に話題になるのが同じ日に生まれてそ

のままセツトで育ってきたという従弟「佐藤洋の存在だ。

著我曰く『あんまり賢くなく。誰とでもじゃれつく出来の悪い犬みたいな奴』『どっかもう一人の自分みたいな感じのする相方みたいなもん』とエライムラのある評価を受けるその少年に鈴はかねてから興味はあった。……無論、男性としてではなく友人が実家で飼ってるペットに対する興味的な意味合いで。

恋人同士ではないのにある意味で実の夫婦以上に強い繋がりを持つパートナーがいる。

それが彼女を『イイ女』たらしめている要因の1つではないのかと鈴は推察していたのだ。

そして、叶うなら自分も『アイツ』とそんな関係になつてみたい……。

そう考えた鈴は瞬間、ある企てが脳をよぎった。

「ねえあやめ、あんたとあんたの従弟って明日の午後とかは時間ある？」

「えっ、あー……多分大丈夫かな？ どうせ佐藤も荷物整理しかやることないだろうし、何？ 午後から一緒に遊ぶ？」

「ううん。それよりちょっと面白い事を、ちょっとね……」

閃いてから数秒、あっという間に構築された『明日のイベント』の青地図を思い描きながら、少しばかりニヒルな感じで微笑む鈴の提案に、著我がノリノリで乗ったのは言うまでもないだろう

「コーヒー淹れました。ここにおいておきますね織斑先生」

「ん、ああ、ありがとう山田君。すまないな……結局残業に付き合わせてしまった」

時刻は間もなく午後１１時を迎えようとした所のＩＳ学園職員室。先に帰っていいと言ったにも関わらず律儀に残業に付き合ってくれた副担任の淹れたコーヒーを受け取る千冬。数時間に渡るデスクワークですっかり固まってしまった身体を伸ばし、胃に熱いコーヒーを流し込む。

「それにしても大変でしたね夕方の事後処理……。幸い佐藤君のご両親や彼の所属している陸上自衛隊からの苦情が無かったので救いですけど……ていうか笑ってましたね。彼のお父さん……」

本日夕刻、ＩＳ学園敷地内で起きた全裸の少年による襲撃事件は国家機関の権力のフル活用でどうにか表沙汰になるのは避けられたがそれでもネット上ではやれ『女尊男卑社会に警鐘を鳴らす為に命懸けの特攻をかったですテロリストの暴走』だの『女子生徒に捨てられ自殺した男子生徒の怨霊』だとか早くも話題になってしまい。事態鎮圧にＩＳを出撃させた弁明も含め関係各所への謝罪と報告がこの数時間の主な仕事内容だった訳だが、その中でも本来なら最も抗議して然るべき陸上自衛隊ＩＳ開発部 佐藤の叔父で著莪の父親が責任者と務める研究機関や彼の実父からの軽い応対に山田はそこから寒いものを感じていた。

実の息子がこちらの一方的な誤解で殆ど全裸にひんむかれ、武装し

た女子生徒に散々追い回された拳句にISで袋叩きにされたというにも関わらず、その話を終始ゲラゲラ笑って聞き流し、拳句『やっぱアイツ、俺の息子だなあ』。俺も昔同じような事をした』などと俄かには信じられない事をいつてのけたのだ。

アンタら親子は2代に渡り何を伝承したんだ！ と温和な彼女がツッコみたくなつた程だ。

「まあ、ある意味では予想通りに反応ではあるな……。何せ佐藤は過去に3度車にはねられた事があるらしいのだが、その内2度は父親による前方不注意が原因らしい。……急な便意に襲われて駐車場で遊んでる息子の姿が目映らなかつたらしい。他にも主に父親や祖父が原因で幾度となく平和な日常の世界で死にかけた過去があるらしい」

「……私が佐藤君なら何の躊躇いもなく児童相談所に飛び込んでいくんですけど……。というか、随分彼の事に詳しいんですね織斑先生？」

俄かには全てが信じ難い佐藤の経歴を聴きドン引きする真耶であったが、同時に浮かんた疑問をそのまま口に出す。《世界で5番目に確認された男性操縦者》でこそあるがどういう訳か織斑一夏とはまるで正反対に世間にその存在を知られていない佐藤の事に妙に詳しい千冬の言動に違和感を覚えたのだ。

「……佐藤自身は私の事を初対面だと思っているようだが、実のところ、私は7年程前にアレと会った事があって……。陸自の駐屯所で新人隊員と同じ訓練をさせられていたよ……」

7年前

当時まだ『ISの軍事利用は全面的に禁止する』というアラスカ条約が締結されておらず、各国家間に緊張が走っていた当時、まだ十代後半であった千冬は半ば強制的な形ではあるが、自衛隊の準隊員と言つ肩書きで所属し、様々な技能を学ぶ事になっていたのだが、その中でも良い意味でも悪い意味でも名の知れた『佐藤教官』の所で学んでいた時期の事だ。

親子2代で自衛隊に所属し、祖父は第2次大戦を生き延びた歴戦の勇士でブービートラップの神と呼ばれる人物。本人も『猛吹雪の日』にバスタオル一丁で出掛け、全裸で帰つて来た』だの『偶にかめめ波の練習に励んでいる』『某国に職場の情報売っている』だのぶつ飛んだ噂に事欠かない彼の訓練は非常に大雑把且つ危険であり、千冬はそのずばらな安全管理によつて何度も死にかけながらも、反面で精神と体力をギリギリまで追いつめられ、成長を余儀なくされた日々を送っていたある日の事。当時9歳だった佐藤は夏休みに入つて間もなくの頃、父親に手を引かれ大の男も根を上がる千冬らや新入隊員と同様の訓練並びに雑用をやらされていたのだ。

父親に聞いたところ、彼曰く『いやね？ 洋の奴が友達から貰ったとかいうネズミの化け物のキーホルダーをいじりながら「夢の国に行きたい」なんて言うからよ。「ゲームの世界になら連れてってやるぜ？」って聞いたんだよ。そしたら目を輝かせて「行きたい」って言うから連れてきたんだよ』という意味不明な解答が帰つてきて理解に苦しんだが、とにかく佐藤は掃除や洗濯などの雑用に追われながらも自分たちと同様に十数kgの土嚢を担いで数十kmの距離を走るなど小学生であることを加味すれば立派な児童虐待級の訓練を強要され、強靱な体力と父親のズレた精神を培つたらしい

「……まあ、そういう訳で当時は弟に接するように何度か話をした

り傷の手当てなどをしてやった事があるんだが……数年ぶりに遭ってみれば、見事に父親似な小僧に育っていた訳だ」

「世の中には色んな親がいるんですね……」

焦燥に狩られた様子で口にする真耶の言葉に『全くだ』と同意する千冬。自分たちの親の様に無責任に子供を捨てる親もいれば、佐藤父の様に破天荒な思考パターンと行動で息子を振り回す親もいる。

人は人生のスタート地点である親元だけではどう抗っても選ぶ事が出来ないのだなと改めて世に蔓延する必然的な不公平を痛感する。そして同時に

「……………あの男、今回の件を恨んでいなかったな……………」

「え？ ああ、そうですね……………」

その様な不公平や不平等、理不尽に対し、微塵の悲観を抱かない佐藤の態度に千冬と真耶は思考を傾ける。

色んな意味で凄まじい親族に幼少の頃から虐待スレスレの目にあわされながらも微塵も気にした様子も見せず親子関係を保ち。自分を裸にした警備員に対しても、ボコボコにした女性生徒に対しても、それを支持した自分たちに対しても、彼は一切、恨みの感情を抱いていない。それどころか目覚めた時にはどういふ訳か股間を全開に滾たぎらせていたのだ。

頭にガタがきているのか。はたまた稀代の大物なのか……。

「佐藤 洋。か……………」

ふと、その名を呟きながら、今後弟と深い関わりを持つ男（無論、性的な意味ではない。……多分）に想いを馳せる。ブリュンヒルデ（千冬）であった

第2話 ルームメイトは金髪（ブロンド）の麗人（後書き）

次回はいよいよIS主要メンバーが登場！

でもってようやく佐藤の専用機も登場する予定です。

因みに佐藤の活躍はすでに筈たちにも知れ渡っています（笑）

第3話 灰狼（アッシュフルフ）（前書き）

皆様お待たせいたしました。

最新話の投稿です。

IS戦はうまく書けたか不安ですが……楽しんでいただければ幸いです。

第3話 灰狼（アッシュフルフ）

第3話 灰狼 アッシュフルフ

あの屈強な警備のおっちゃん（スプリガン）との肛門の純潔を賭けた激闘から幕を上げた僕のIS学園生活二日目の朝は、ボサボサの金髪が鼻をくすぐ擦る感触から始まった。

夜中、予告通りビニール袋いっぱい詰め込んだお菓子とジュースを持参してやって来た著莪と明け方近くまでゲームをした後そのまま僕たちは寮に備え付けられたシングルベッドで重なるようにして寝落ちしてしまっただけらしい。鼻孔を擦るのは、著莪のシャンプーの匂い。中学の頃まで……といってもまだ2カ月程だが、毎晩の様に嗅いでいたものだ。

お互いの実家が200mも離れていない上に自衛隊員やIS開発者及びその助手、ネトゲ廃人という職業柄、共に両親が家をあげがちな事情もあつた為、夕飯と一緒に食べた後にどっちかの部屋で深夜までゲームをし、そのまま寝てしまうというのは日常的にあつたら、このシチュエーションに特段、同様なんかはしない。しない筈なのだが……

「んん……アレ……もう朝……？」

服越しに伝わる感触に数か月前にはまだ感じられなかった明確な柔らかさが……コイツ、もしか成長したというのか！？

確かに冬場は厚手の服に覆われていまいち確認は取れず、実質的には半年ぶり位だが、その頃の著莪の胸なんてまだこんな……コレが……コレが二次性徴の力だということのか！！？

「今何時だろ……ってオーイ佐藤く！ お前はそんな目を見開いた状態で寝てるのか？」

素晴らしい……全くもって素晴らしいとしか言いようのない現象だ。これはもう奇跡の所業。生きとし生ける全ての男子諸氏の希望と言っても過言ではない。僕は人体の神秘に歓喜し、朝日が差し込む窓に意味もなく敬虔な信者の如く祈りを捧げたい衝動に狩られた。

「おーい！ いい加減無視すんなっつの！」

「はうあっ！！？」

だが、そんな僕の神への信仰は突如男子にとって最もデリケートな部分に稲穂の如く走った衝撃によって消し去られる。

先程から僕が人類の進化や人体の神秘について大変に高度な考察に没頭しているのが面白くなかったのか。いつの間にか目を覚ましていた著我はあるう事が健全な10代男子特有の生理現象でその……朝から大変立派な事になっていた僕のアレを掴み……

「オラオラオラオラオラア！」

「アバババババババツ！」

彼の名作《ヨの奇妙な冒険》の3代目主人公ばりの勢いで著我が僕のナニに猛攻を仕掛け、僕は壊れた人形の様な奇声を上げてのたうち回る。

ああ、神様。僕が一体何をしたというのですか？ 僕はつい今しがたまで、この世界に二次性徴という素晴らしい現象を生み出してくれた貴方に、感謝の意を示したいたのですよ？

「ふう、やれやれだぜ」

「うぐう……」

「ホラ、佐藤。もう目が覚めたでしょう？　ボチボチ起きて飯食わないと約束に遅れるぞ！」

自分が男の子にとってどれほどな苛烈な事をしたのか理解していないのか、彼女は悪気なくニツコリと笑いながら起き上がる。時計を見ると確かに既に10時を回っており、12時の待ち合わせまであまり余裕がない。

「ああ、そうしたいけど男子寮^コって休日^コは食堂やってないんだよな……。女子寮は男子禁制だし、食べるトコって他にある？」

「んー、ならアリーナに向かっちゃおっか。あんまりメニューないけど軽食とかおいてあるカフェあるし、それが購買にあるコンビニッて手もあるけど」

「ならアリーナの方に」

「310号室　佐藤　ここだな」

昨日まで主の居なかった男子寮の部屋の前、IS学園に在籍する80名ばかりの男子生徒の中で唯一の操縦科生徒であった（……）

織斑 おりむら いちか 一夏はインターホンを鳴らした。時間は既に午前10時過ぎ。彼の基準では休日と言えど十中八九起きているであろう時間を見越しての訪問の目的は無論、今後何かと行動を共にする事になるであろう自分に続く『二人目の操縦科生徒』である佐藤 洋への挨拶だ。

2月に起きた驚くべき偶然の連続の末、世界を揺るがす大二ユースと共に半ば強制的に通う事になったIS学園に入学して早1月半。一夏はこの日を心待ちにしていたのだ。

何しろ本校は世の女尊男卑社会の要因となったISについて学ぶ世界唯一の教育機関。女子の女子による女子の為に設立された女の園と同じく高倍率の入試を受かった世間的にみれば充分に優秀と言える男子でも、女子とは深い溝 否、決して埋められない高い壁がある。

そんな絶壁の向こうの女子エリアへと唯一人放り投げられた彼は言わば珍獣扱いであり、また寮の中では「何故だか」敵意を向けられるか腫れもの扱いされ無視されるかの2パターンが殆どであり、正直な話、すこぶる居心地の悪い日々を過ごしていた。

現在の社会風潮に良い感情を抱いていない身としては自分と言う存在がこの学園の中心に聳 そびえるそんな男女の壁を多少でも低く出来ればと入学当初は思っていたが、これが中々思う様にいかない。

現に自分を『ISを操縦出来る男子』としてではなく、1人の「織斑 一夏として」扱ってくれている友人と確信できるのは、幼馴染 おさななじみ の《篠ノ しの（の）之 の 箒 ほうき》と《鳳 ファン 鈴音 リンイン》に入学当初に勃発したクラス代表決定戦の末に分かり合えたイギリス代表候補生の《セシリア・オルコット》そして鈴を経由して知り合った。著莪あやめの4人くらいであろう。

そんな一夏にとって、これから知り合う佐藤 洋はさながら歓迎すべき増援とも言える存在であつた。詳細は知らないが自分と同じ様に偶発的にIS操縦者になつてしまったらしい同い年の少年。彼との邂逅が待ち遠しく。『約束』に先んじて会いに来たのだ。無論、そこに性的な意味合いはない。

「まだ寝てんのかな……？」

インターホンを鳴らして既に数十秒。何かしら部屋の中でドタドタと物音が聞こえるが、ドアが開く気配はない。もしかして入寮1日目にして既に部屋に招き入れる友人が出来て、ふざけ合っているのだろうか？ だとしたら羨ましい。と、現状高校ではまだ1人も同性の友人が出来ていない一夏は素直に思う。

「おい！ 佐藤くん？」

しばらく待った後、今度はドアを少し強めの力でコンコンとノックし、その名字を呼ぶ。

するとしばらくして

「ハイ！」

今気付いたとばかりに間延びした返事と共にドアノブが開く。すると視界には見覚えのない自分と同じ位の背格好の少年と、見覚えのある。天然物の金髪をボサボサにした眼鏡の少女が……居た。

それも、黒髪の少年の背中に金髪の少女が抱きついていているという。第3者視点から見れば、かなり親しげな様子で、男子寮の一室と言う空間で

「おつ、一夏じゃん！ オッス！」

「えっ、著莪の知り合い？」

「オ、オジャマシマシタ……」

至つて自然体で自分に挨拶をする著莪や、そんな彼女に背中から抱きつかれた状態でも自然体で彼女に疑問符を向ける佐藤と思われる少年を尻目に、一夏は固まった表情で機械的に扉を閉めるのであった。

「アハハ、そつかそつか、勘違いか。俺はまたテツキリ二人がそういう関係なのかと……」

時間は間もなく午前11時になるうかと言う頃、僕と著莪は初対面で行きなり『深夜ふと目が覚めたら両親が実にアブノーマルなプレイスタイルで自分の弟妹の生産を行っている様を見てしまった中1男子』の様な間抜け面を向けた織斑君に対し、本日の待ち合わせ場所である第1アリーナに程近い位置にある学園内のカフェテリアで今朝の事に対する説明をしつつ、遅めの朝食としてホットドッグを口にしていた。

「普通にゲームしてそのまま寝落ちしただけだって、まあ確かに迂闊に開けて先生とかだったらまずかったけど」

「命拾いしたよな？」　って訳でここは佐藤の奢りってことで」

「いや、なんでそうなるんだよ。この場合は著莪も共犯」

「このご時世で女子の言い分と昨日全裸で校内を駆け回った男子の言い分、どっちが信じられるんだろっね」

「くっ……」

ニヒヒと楽しそうに笑いながら一緒に頼んだアイスカフェラテを飲む著莪。そうだった。コイツが先に学園に来てからの期間は平和そのものであったが、基本的に彼女は僕の財布を自分の第2の財布として扱い。只でさえなけなしの仕送り（毎月3万円）しか収入源の無いペラペラの財布を恋人の様に親身になって金を貸し、悪魔の如き利子を加えて取り立てる消費者金融の如く搾り取るのだ。

バックアップ・ポケットブック

目を瞑れば思い出す。未だに断ちきれぬ悲しみの連鎖

『なあ佐藤。寒いからおでん食べよう。てか奢って。ていうか奢れ』

ノーと言える日本人の僕はキチンと反抗

『よし、じゃあこうしよう。じゃんけんしてアタシが買ったら佐藤がおでん奢る。負けたらそうだな　キスしてやる。思いつきりデイーブなやつ。……いい？　アタシ絶対パー出すからね。パー。じゃーんけーん……』

この時点で僕の選択肢は2つ。仮に僕がチョキを出せばこの手の事で嘘を付かない著莪は必ずデイーブなキスをするだろう。しかしそうならなつたで著莪は翌日学校中に『僕とキスした』という話を面白おかしく広め、校内ではクールなナイスガイとして決めている

る僕のイメージは総崩れ。更に憧れのマドンナである広部さんに妙な誤解を与えてしまう　事実上僕には、ゲーを出し、泣きながら著莪におでんを奢る道しか残されていないのだ。

やはり食費の節約は豊かな学園生活を送る上で重大な課題になるだろう……。

一方、そんな僕らのやり取りを見て、織斑君はまた不思議なモノを見る様な目をしながら、僕に質問をする。

「なあ佐藤、あやめ。お前らっていつもそんな感じなのか？　何て言うか　スッゲー仲いいのな」

「え、そうかな？　従姉弟でしかも近所同士で過ごしたなら大体こんな感じじゃない？　殆ど姉弟と変わらないもんだし」

「いや、ウチの場合姉さんとはそこそこ歳離れてるし。それにそうだな……仲の良い幼馴染は2人いるけど……2人共なんでか俺への当たりが強いんだよなあ」

そう言いながら溜息を零す織斑君の少し丸まった背中中は、IS発表以前からご近所でも有名な力カア天下で知られる実家斜向かいに住む安田さん家のご主人に似ていた。ハハーン、さては彼、石岡君と同じタイプの残念系男子だな？

小中9年間で大体いつも同じクラスになっていた石岡君。彼は今どうしているだろう？

中3の1学期期末試験前日。僕が時を操る魔法に憧れ、ほんのささ

いな悪戯で彼の部屋にあつた目覚まし時計の針を1時間戻した結果、テスト初日に遅刻した結果内申点を下げ、当時成績が横並びで僕と争っていた私立烏田高校の推薦枠を奪われた結果、1ランク下の高校に行く事になってしまった彼は、今、どんな間抜けな伝説を紡いでいるのであろう……。

「あ、いたいた！ アンタたちもう来てたんだあやめ！ 一夏！
で、そっちの奴が例の……？」

と、僕が今のこの空の下の何処かでロクな事をしていないであろう旧友に想いを馳せていると。近づいてくる3人の女子生徒が現れた。その中でも一番小柄で、何処となく猫を連想させる印象の少女が著莪や織斑君に親しげに声をかけ、何故か僕には微妙な距離を保ちつつ、珍獣を観察する様な視線を向ける。

一目惚れひつめほさせてしまったのかもしれない。

「おはよ鈴^{リン}。うん、そう。こいつが従弟の佐藤。まあバカだけど1つ仲良くしてやって」

「その自己紹介はないんじゃないか著莪？」

「や、大事な事だし……ねえ？」

何故か当然の様に僕にバカの式を成り立たせる著莪をジト目で見るが、彼女は全く気にしない。全く、お前は何年僕の従姉をやっている？ 僕と言えbaumと色々あるだろう？ イケメンだとか。クールに見えて実は熱い男だとか。今はアイドルとして絶賛活躍中の広部蘭こと鬼灯ランさんの中学時代の未来のダーリンだとか。小4の

夏休みの自由研究で石岡君を被検体サンプルに祖父じいさんに仕込まれた十数種類のブービートラップを駆使し、極めて多種多様かつ詳細な情報を記録した『意外と簡単なブービートラップ』というテーマの研究成果を提出するくらい知性溢れるナイスガイだとか。

因みにまたまた余談だが、この研究成果はあまりの完成度から6年たった現在でも動画系サイトで見る事が出来る。興味のある者は『玄関開けたら1秒でブービートラップ』ないし『いつてきまああああ　！？』のどちらかのキーワードで検索すれば見つかるので試してみるといい。

自宅玄関前を一步出た途端、地上数メートルまで瞬時に釣りあげられたバカそうな10歳前後の少年、それが件の石岡くだん いしおか 勇気君だ。

「フーン、まあ確かにバカじゃなきゃ裸で学園走りまわらないわよね。あたしは鳳 鈴音。あやめとは同じクラスでルームメイト、で一夏とは幼馴染の中国代表候補生よ。取り敢えずよろしくね佐藤」

「篠ノ乃 篝だ。……………よろしく」

「セ、セシリア・オルコットですわ。……………本来なら貴方の様なその……破廉恥な殿方とはあまり親しくしたくはないのですが……あやめさんの従姉さんという事ですし、一応、“友人の友人”として扱わせて頂きますわ……………」

そんな著莪の酷い紹介の所為せいか。或いは昨日あるの一件が未だに尾を引いているのか。鳳さんはまだいいとして、長い黒髪をポニーテールにセットし、少し釣り上がった目と急成長を遂げた著莪すら凌駕するかもしれない。大変良い乳房をした篠ノ乃さんと、少しウェーブの掛った金髪のロングヘアに青い力チューシャが印象的なスラリとしたモデル体型の、北欧系女子のオルコットさんら二人の僕に対す

る態度は露骨に変質者を見る様なソレであつた。

僕に気があるのかもしれない。

「フーン。確かに少しバカっぽいけど、案外普通の見た目ね？ てか、アンタたち、従姉弟なのにビツクリする位似てないわねえ」。

もしかして複雑な家庭環境？」

そんな僕と彼女たち二人の間にある微妙な空気を汲んでくれたのか？ 鳳さんが二人とも親しいらしい著莪を絡めてのネタで話題を振つてきてくれた。そこへ更に織斑君も乗る。

「だよなー。それにお前らお互い名字で呼び合うのも変じゃないか？ そんなだけ仲良いのに。それに親戚とかで集まったら面倒じゃないのか？」

「あー、それは著莪が『デス リ ゾン』っていうゲームにハマつて、そこに出てくる『横滑り佐藤』っていうのが気に入ってそれで……まあ、半分あだ名みたいなもんかな？」

因みに敢えてスルーさせて貰ったが、親戚関係の集まりの心配は必要な。何故なら数年前、正月に親戚一同が集まった際、僕と著莪の誕生日が同じと言う事に関して話題がふられた際、弟である著莪パパに

『つまりアレか！ 俺たち同じ日に仕込んだってわけだ、やっぱ血を分けた兄弟だな！』

という最低の下ネタを口にして以降、一切その手の会合に呼ばれなくなつたから……。

おかげで子供にとっては最大の収入源であるお年玉も激減である。
親父はビンボー神かなんかか？

「……一夏、あやめ。談笑もいいがそろそろ向かわないとアリーナの
使用時間になってしまうぞ」

「ああそっか、あんがと筈。そんじゃ佐藤、あたしら先に出るから
会計は任せた！」

「ってオイ！ ホントに僕が奢るのかよ！？」

「なんならまたじゃんけんする？ あたしが勝ったら佐藤の奢りで、
負けたら胸を揉ませてやる。直で。いい？ あたしグー出すから」

「えっ、ま、待て著莪！ ちょっと」

「じゃんけん」

その後、僕の財布が3人分のドリンク代と2人分のホットドッグ分、
軽くなったのは語るまでもないだろう……。

当然の話ではあるが兵器として最強を誇るISは、学園の敷地内に
おいても好き勝手に使用は出来ない。例え何時でもどこでもISを
起動できる専用機の持ち主でも。そしてその限られた使用が出来る
場所の1つが、学園内に5つ存在する競技用アリーナだ。

現在、表向きにはスポーツ競技としてその地位を確立しているISを公式大会と同じ環境下で操作し、模擬戦も行えるこの施設は、授業での使用は元より放課後や休日なども向上心のある生徒で連日賑わっており、また事前の申請を行ってそれが受理されれば一定時間、貸し切りにして公式戦と同じ環境下での試合を行う事も出来、そういった試合が行なわれる際は寮の掲示板に大々的に宣伝され、対戦カードによっては休日に予定の無い生徒にとって恰好の娯楽の一環にもなっていたりする。

そして、その日行われる試合はそういった話題性で言えばかなりの好カードであり、広大な観客席にはかなりの人数の女子生徒で賑わっていた。

『学園に2人、世界に5人しかいない男性操縦者同士の対決』

という。滅多に見られない一戦に

「いやー、夜中に思いついて朝の告知だったのに随分集まったな」

「まあ、これ位は当然なんじゃない？ この間のクラスマッチも含めて一夏つてばもう学校中の注目の的だし、佐藤は佐藤で昨日の騒ぎで色んな意味で噂になってるし。注目された人間同士の対決ではあるからね」

「鈴、あの男と一夏を同じ土台で上るな。注目のされ方が違う」

「そうですね！ あんな変態さんと同じ扱いでは一夏さんが可哀そうですね。そもそもに勝負になるかどうか……」

そんな客席の込み具合を見渡しながらこの注目の一戦をマッチメイクした著我と鈴、そして箒とセシリアは、雑談を交わしながら他の者と同じ様に試合開始を待つ事になっていたが、そんな彼女たちの背後に、威厳に満ちた気配を纏う女性が近づく。

「ほう。篠ノ乃とオルコットは随分と織斑臍肩の様だな?」

「お、織斑先生! 何故こちらに?」

「試合の見物に決まっているだろう。それと小娘共がはしゃぎすぎないかの見張り、といった所だ。隣いいか?」

「ど、どうぞ……」

現れたのは1年生の寮長にして、学年主任。有事の際はIS学園における全指揮権を保有する権力とそれに見合う力量を併せ持つ。まさしく現代の女武将。初代ブリュンヒルデ 織斑千冬。彼女の登場に著我を除く3人の態度や表情はさながら借りてきた猫の様に豹変。そこには畏敬の念とは別に、未来の義姉になるかもしれない人物へのご機嫌取りという側面があるのと言うまでもない事実だろう。

「「「……………」」」

「ん? どうした? いつもみたいにバカ騒ぎはしないのか? 休日なんだ。遠慮する事はないぞ?」

「ハ、ハア……………」

「それは、そうなんですが……………」

「うう……」

4人の少女たちの座る席の一段上の席に鎮座し、試合前の余興で見
るかのように促す千冬。

しかし『気になるアイツのお姉様』を前にナチュラルな自分をさら
け出せる十代女子がこの広い世界に果たして何人いるのだろうか？
そしてそんな微妙な緊張感の伴う空間を著我だけはニヤニヤしな
がら見守る。

「フン、つまらん……。で、著我、実際のところお前の従弟と織
斑、どちらに分がある？」

そんな緊張でかたまつた3人娘いじりにも飽きた千冬は隣に座る。

この中で唯一、自然体のままな著我に質問、彼女だけが今日これか
ら戦う事になる佐藤と一夏、その両方の実力を把握しているからだ。

「うーん、そうですねー。IS関係ないガチの殴り合いとかなら多
分佐藤が勝つんでしょうけど、IS戦だと……普通に戦れば（……
……）一夏の勝ちには堅いと思いますよ？」

「ほう」

千冬の率直な質問に、これまた忌憚のない率直な意見を持って返す
著我。

『単純な戦闘能力では勝るがISを使用した戦闘では勝てない』男
女間ならいざ知らず、同性同年代同士による戦いにしては随分と極
端な結果予想だ。

「なにそれ。佐藤ってもしかしてまだ稼働時間少ないとか？」

「いんや。学園^{「」}に来るまでは叔父さんたちにぶっ続けで訓練受けさせられてたらしいから少なくとも一夏よりは長いと思う」

「では、どうして？」

「単純な話で機体性能差。なんつっても佐藤のISって」

「第1世代機っ!？」

「うん。まあ……」

更衣室でISをより効率的に運用する為に着用するISスーツに着替える最中の雑談で僕が漏らした一言に驚く織斑君。無理もない話だ。

世界で最初のIS 白騎士 が完成してから10年。既にその開発は第3世代機主流で動いているご時世において僕の使う機体は2世代遅れの第1世代。PS3やらWiiなどというハードが席巻するゲーム業界において、未だに名器とはいえ^{セガサターン}SSを熱心にプレイする位、世間から見ればアナログといえるだろう。

「ここだけの話なんだけど、僕のISって元々はコアに異常を来たした欠陥機で、どういう訳かウチの親父が僕、著莪にしか反応しなくなっちゃんだ。それでその原因解明も兼ねて息子の僕に押し付けられたという訳で……」

っていかそももコアをブツ壊したのがその親父んだけどね！

この事まで口外すると確実に国際問題に発展しかねない。只でさえ以前、職場の情報を“北”に売ったのがバレそうだったのに……アレか？　ウチの親父はもしかして日本と僕の平穏な生活を壊滅させる為に送り込まれたどこぞの国家機関のまわしものか！？

「そ、そつか。お前も色々大変なんだな……けどそれじゃあ逆に他のISは動かせないって事なのか？」

「著莪は普通に適性Aだったらしいけど僕の場合は全然。だからコレが僕の専用機って言うより、僕がコレの専用テストパイロットって感じなのかな」

そう言いながら惜しみない哀れみの視線を向ける織斑君に対し、僕は左腕に付けた金属ベルトのアナログ腕時計　待機状態になっている専用機　灰狼^{はいろう}を見せる。ああ、なんだろう。ここに来る事になった経緯を話したらなんだか親父のバカ笑いを浮かべる姿まで思い出して一気にブルーになってきた。

ホント、僕のテンションを下げる事に関して、あのおっさんの右に出る者は存在しない。

『間もなく。試合開始時刻です。両選手はピットに入ってください』

「おっ、いよいよか。じゃあ、アリーナでな佐藤。お互い全力を尽くそうぜ」

「う、うん」

そんなやり取りの所為もあって男二人の間で微妙な気まずさが生まれつつあったが、いいタイミングで呼び出しがかかった事と、気を利かせて明るく振る舞ってくれた織斑君の気遣いにより、幾らか空気は緩和された。

どこか人の気持ちに鈍そうな、石岡君（残念な友人）と同類の匂いがした彼だが、どうやらかなりいい人っぽいのは間違いないらしい。

『間もなくハッチが開きます。両選手はISを起動して発進態勢に入ってください』

スタジアムへと続く薄暗いピットの中で響く女性的な電子音声が続く中、僕は腕時計（IS）が巻かれた左手をかざし、展開。最初は5分くらいかったが、今は1秒強で頭の中でイメージが構築出来る様になった。後はエンターキーとなる一言だけだ。

「行くぞ。灰狼！」

瞬間。僕の身体を白い光が包み込み、視界が開けるとそこにはもう紺色のISスーツの周りを灰色の金属の装甲が覆っており、右手には先端にブレードの付いた自衛隊御用達のIS装備であるアサルトライフル 爪牙^{そうが}が握られている。これが僕、佐藤洋の一応専用機である灰狼の展開状態だ。

全体的なシルエットはシンプルで、色と同様非常に地味。両肩に非^ア接続状態のショルダーラスターも含め、全体的に角ばったデザインではあるが装甲は薄く。なんつーかまあ……何度展開しても冴えない印象のあるISだ。ぶっちゃけ同じ国産で量産機でこそあるが、

第2世代機である 打鉄^{うちがね}の方がまだ幾分華やかでもある。この機体をいきなり多数の女子生徒が観戦する場でお披露目するのは、パソニーで校内を駆け回る様な恥知らずな行為ではないだろうか？
まあ、そんな変態いるとしたら親父くらいなもんだろぅが……

ましてやTVで連日注目される華やかな織斑君の第3世代機と対峙するなど……

僕の心に初めての“試合”に対する戸惑い。圧倒的な機体性能のある敵への恐怖など、無様な敗北を晒すかもしれない事への羞恥心、様々な負の感情が巡る。

誰もが無理だと思ふ勝負をひっくり返す。それが……楽しいんじゃないか。

「っ！」

だが、次の刹那、僕の脳裏に“彼”の言葉がよぎる。

中学卒業から訓練が完了するまでの2ヶ月間の特訓期間中の内、1週間だけ、ふらりと陸自の駐屯地に現れた後、僕にIS戦や灰狼を扱うコツを伝授してくれた長身痩躯の青年。 魔導士^{ウィザード}と呼ばれた男の言葉が

『あらゆる性能で現行機に劣る旧型、時代遅れのアンティーク。確かにそれがこの機体に向けられる正当な評価だ。だが、それがどうした？ 所詮ISを動かすのは人間だ。最新鋭機を生み出す技術も

また人の英知が生み出すものなら、その機体性能を引き出すのもまた操縦者の知恵と技術、勝利への執念だ。答える佐藤。お前がなりたいのは高性能機に依存し、ただISという絶対的な力に使われる（……）だけのマネキンか？ それとも、ISという道具を支配し、機体の限界を己が力で突破する誇り高き戦士か？ もし前者になりたいというなら、俺がお前にその機体より遥かに優れた機体をくれてやろう。だが、もし、痛みと共に歩み続けるというなら

」

俺がお前に、力の使い方を教えてやる。

彼曰く。前者の道もまた1つの答え。最新鋭機の開発に心血を注ぐ技術者の努力や、それを使いこなすテストパイロットたちの努力もまた誇り高き戦いではある。だが

「時代遅れの機体を手に、そんな最新鋭機やその使い手を戦う。それともまたいい、愚かで無様と揶揄されるのが何だ。僕は……僕だ！」

女尊男卑も、旧型も新型も関係ない。親父の汚い尻ぬぐいだって、きっかけでこそあるが僕がここに在る意義じゃない。

僕は……そうだ。ISによる戦闘という最高の舞台で空を駆け抜け、強敵たちと戦いたくて、この学園に来たんだ。そして今、その最初の機会がもう眼前にある。

何を恐れる必要がある？ 待ち望んでいたものは、もう目の前にあるんだぞ？

『試合開始1分前です。選手は直ちに入場してください』

僕の心の中を覆っていた霧が晴れるのと同時に無機質な電子音声に

続き、ハッチが開く。

見えるのは何処までも広がる青空。

聞こえるのは、戦いを待ち望む。観戦者たちの声援。

僕は1度、深呼吸した後にスラスターを起動。フワリ、とIS独自の浮遊感に包まれながら空へと翔ける。

アリーナ中央、上空20mには既に織斑君が駆る彼専用機 白式が待ち構える。

僕の灰狼とは別物みたいにカッコイイ、純白の機体。心なしか『キヤー！ 佐藤君素敵！ 抱いてっ！』より『織斑君がんばってっ！』という声援の方が多いのは、多分この機体のデザイン差だろう。

「……………」

「どうかした？」

ふと気が付くと、織斑君はまた不思議なモノを見る様な目で見つめる。もしや彼には男色の気があるのだろうか？

「いや、さっきまでと随分顔つきが違ってたってさ。なんつか……………いい顔してるっていうの？」

やはりそうだ！ 間違いない！！

そう言えばこいつ、ISスーツを着る際も『佐藤って意外といい身体してるんだな』とかいって僕の引き締まった肉体を舐めるように見ていた……………様な気がする。

なんてこった……。

まさか女子率80%の学校に転入して最初に男のハートを奪ってしまっなんて、いくらなんでもトリッキー過ぎだぞヨー・サトウ！

だが落ち着け、例え織斑君にそっちの気があるうとも、例え僕に特別な感情があろうとも、今の彼は1人の敵。余計な雑念は捨て、これから始まる戦いに心を向けるべきだ。

「ん、なんだ？ 俺なんか変な事言ったか？」

「い、いや別に……気持ちだけ受け取っておくよ」

「?? お、おう……」

ゴメンよ織斑君。生憎僕にそっちの趣味はないんだ。

内心で彼の気持ちを丁重に断った僕は、再び雑念を捨て、爪牙を構え、距離を取る。

<READY?>

試合開始10秒前
までの時を刻む。

正面に映し出されたタイマーが戦闘開始

織斑君の操る白式もまた、刀を模したブレードタイプの武器を呼び出し構え、僕たちの間にピリピリとした。それでいてどこか心地良い緊張感が生まれ、耳に届く会場の喧騒も遠くなる。織斑君の表情もまた、感情の色を消し、集中力を高めている様だ。

5……4……3……2……

胸に燦^{くすぶ}る闘争心を令、解放する！

GO！

「おおおおおつ！」

試合開始の合図と同時に、僕は獣の様な雄叫びをあげて大地を蹴りあげる様に前へ跳び出し互いの間合いを詰める。

次の瞬間、僕と彼の剣はガキン！と耳に響く金属音を上げて火花を散らす。織斑君の顔には驚きの色。明らかに機体性の差がある僕が、初手からいきなり突っ込んでくるとは思っていなかったらしい。動きに僅かだが反応に遅れが生じている。

「うおつと！ いきなり突撃で来るなんて……意外と熱いんだな佐藤は！」

しかし、そこは最新鋭機とその乗り手、僕の勢い任せの剣撃を近接ブレードで的確に受けた後、罅^{つば}迫^ぜり合^あいの状態に持ち込んだ後に出^ト力で僕を押し返す。

奇襲じみたこちらの攻撃に笑みすら零す。

「けど、この間合いなら俺は負けない。何しろ俺は接近戦専用だからな！ ハアアアッ！」

次の瞬間、僕の身体に子供の頃に車で撥^はねられた時のそれに似た衝撃が襲いかかる。罅^{つば}迫^ぜり合^あい状態から巧みに僕の爪牙を下方へと逸らした白式はそのまま間髪^{かんぱつ}入れ時に上段から渾身の力を込めた

一撃を振り下ろす。

僕も咄嗟に態勢を整え刀身でそれを受ける。だがかなり無理をして取り繕った防御態勢は、所詮は張り子の虎、エネルギーを著しく消費する 絶対防御 の発動こそ免れたが僕はその太刀の威力に吹き飛ばされ、地上に叩きつけられる。

「バ、バカげていますわ……。第3世代機に第1世代機でいきなり正面から挑むなんて」

「上手く耐えたからいいけど、ヘタすりや今ので瞬殺だったわね……」

「やはりあの様な変態。（私の）一夏の敵ではない」

「相変わらずバカだねえ」佐藤は

戸惑い。呆然。確信。そして愉快。佐藤の一連の特攻 玉碎の流れにそれぞれの感想を口にする著我ら4名。その心象は『興奮して迫る猛牛とそれを華麗にかわす闘牛士』に近い。

性能差が明らかな上に能力値も未知数な相手に正面から挑むという彼の行為は、本格的な戦闘訓練を受けている鈴やセシリアから見れば、愚の骨頂とも言える様だったのだ。

「……………フン」

しかし唯一人、この場で最も 闘い を理解している筈の千冬だけ

は、彼女らとは違う感想を抱き、どこか機嫌がよさそうにしていた。

「オーイ、大丈夫か？」

佐藤が駆る灰狼がアリーナのグラウンドに叩きつけられた事で舞い上がる砂埃の中、予想外に景気よく吹き飛ばされた彼の身を案じてか呼びかける一夏。絶対防御を持つEISを装着している以上、怪我をしているという事はまずないだろうが、或いはあまりの衝撃に気を失っているかもしれないという判断だ。

だが、それは失策となる。

警告：この機体はロックされています

「なっ！」

眼前に映し出されるディスプレイに表示された警告を読み終えると同時に、突如土煙の向こうから飛来した小さな物体の突撃により、白式のシールドエネルギーが僅かずつ削られる。

一瞬の動揺の後に慌て回避運動を取り、ハイパーセンサーの機能を全開にして攻撃の発信源に目を向けるとそこには、落下によって生じたクレーターの上に立ち、先程ダメージから来る痛みから苦悶の表情を浮かべながらもアサルトライフルを構え、現在進行形でこちらに向かつて打ち続ける佐藤の姿があった。

気絶していてもおかしくない程の衝撃を受けてから僅か数秒。彼は驚異的な早さでリカバリーし、立ちこめる砂埃を強かにも利用して、こちらに反撃を仕掛けたのだ。

「気付かれたかつ……！」

こちらの予想より数秒は早く回避運動を取り始めた白式の動きをセンサーで確認しつつ、僕は短く舌打ちをしながらその場を移動。もう少しエネルギーを削れるかと思っただがそこまで甘くなかった様だ。

上空では今もフルオートで射出され続けている弾雨を機動力にモノをいわせて回避する白式。その機動力には舌を巻きたくなるが、こちらに対抗して射撃武器による反撃はおろかシールドを呼び出しているの防御すらせず、回避運動を取りながら『近づく隙』を窺っている様にも取れるその動きから先程彼が漏らした言葉が真実である事を確信。どうやら白式には本当に中遠距離に対応した装備はないらしく。完全な接近戦オンリーな機体であるらしい。これはパワーとスピードで大きく劣り、それなりの装備を持ってこそいるが、致命打を与えられる装備を持たない僕と灰狼にとって、非常に有益な情報だ。

不確定要素も多いが、僕はある1つの作戦が思いつく。

そして数秒たった後。マガジンの弾丸を撃ち尽くし、それまでけたたましい音を立てていたライフルが沈黙した次の刹那、雄叫びを上げてブレードを構える白式が迫る。

僕はスラスターを後方に向けて吹かし、襲い来る衝撃を可能な限り軽減させながら、爪牙で彼の攻撃を受ける。

「悪いけどもう撃たせない。このまま押し切らせて貰うぜ！」

「だったら僕は引くまでだ！」

また距離を取られて射撃武器でチマチマ攻められては面倒とみてか一気に勝負を決そうとする織斑君に向け、僕は残弾の尽きた爪牙を投擲^{とうてき}。彼は近接ブレードでそれをあっさりと弾くが、それにより彼の意識から一瞬逃れた僕はスラスターを全開にして上空に飛び、アリーナ周囲に半球状の発生した透明のバリアに足を着け、そこを全力で蹴って再び地上へと降下する。

「うおおおおおっ！」

「特攻！？」

そう。彼の言う通りこれは捨て身の特攻だ。スラスターの出力に加え、落下という作用を利用して重力を、さらにエネルギーシールド蹴る事で脚力による勢いも加えた。灰狼^{ほくら}に出来る最大スピードでのこの身そのものを武器にした体当たりだ。前方に向けて腕を交差し、僕は1つの巨大な弾丸となって白式に体当たり。僕がまた距離をとっての射撃戦を仕掛けると踏んでいた織斑君は完全に虚を突かれたと言った様子で僕と言う名の攻撃をモロにその身で受け止めて吹き飛ぶ。無論、白式も僕の灰狼もシールドエネルギーがかなり削られたが、幸運にも僕が狙いは最高の形で達成される。

「つつつ………っ！ 雪片^{ゆきひら}は！？」

今の衝撃で織斑君は、武器を落としたのだ。そしてそれこそが、僕の狙い。

それまでの彼の動きから、僕は織斑君の白式は少なくとも『射撃装備・防御装備がないこと』と『とっさに呼び出せる武器が無いこと』を確信し、彼を無力化するには彼を今現在持っているブレードから引き離すのが1番と踏んだのだ。

ISには武器を粒子化してそれをいつでも実体化出来る便利な機能があるが、その呼び出しには馴れた者でも数秒、不慣れなら最悪十数秒の時間が必要となっており、その間彼は完全な無防備だ。更に僕の右手には特攻前に事前に呼び出し準備をしていたグレネードランチャーが握られており、彼が少しでも武器呼び出しの為の動作をすれば間髪入れずに打ち込める準備が整っている。

そして、もし、可能性も高くはないだろうが僕が密かに予想する第3の予測 『白式には近接ブレードしかない』 ならば……

「クソッ！ 間に合えっ……！」

白式の遙か後方、フィールドの端に突き刺さっている武器そのものを破壊すればいい（……………）。そうすれば彼はまともな攻撃手段を失い。事実上僕の勝利は確定だ。

そしてその第3の予測が的中し、スラスターを全開にして突き刺さる自分の唯一の装備に向かって翔ける織斑君の動きを見て、僕は迷うことなく引き金を引く。

如何に第3世代機のスピードを以てしても弾丸を超えることは出来ないし、発射されたのは威力抜群のグレネード弾だ。僕は密かに承知を確信し、笑みを零す。だが……

「ハアアアッ！」

「なっ……………！」

そんな僕の勝利の確信は一瞬にして瓦解する。咆哮と共に白式はそれまでとは比べ物にならないスピードで加速し、僕が放ったグレネード弾が着弾するよりも早くブレードまで引き抜き、それを守ったのだ。

虚しくアリーナの壁に穴をあけただけのグレネード弾が生み出した黒い爆煙を背に、彼は劣勢から一転して再び優勢を手にした者特有の笑みを零す。

イグニッションブースト
「瞬時加速……使えたんだな」

「まだロクに使いこなせてないんだけど……そういう佐藤こそ、捨て身の特攻を決めたかと思ったら武器狙ったり、よくもまあ次々と攻め方変えてくるよな……スゲーや」

対して苦し紛れの強がりや冷や汗を零しながら作り笑顔を零す僕に彼は称賛の言葉をくれた。機体性能を考えれば充分に健闘し、対戦相手である彼にそれなりの脅威を与えられたようだ。無論、それだけで満足するつもりなど微塵もないが

僕は最終的に失敗した策への未練を断ち切るかのようにグレネードランチャーを投げ捨て、新たな装備を呼び出す。グレネード弾は威力こそ高いが通常の銃弾に比べ弾速が遅い上に装弾数も少ない。万全の態勢を取り戻した白式にはまず通じないだろう。持ってるだけ無意味だ。

気持ちを切り替え、僕は新たな一手 恐らくは最後の一手となるであろう攻撃の為に、サバイバルナイフを模したショートブレードを装備。その切っ先を白式に向けて、宣言する。

「もう僕には織斑君を翻弄させる様な手札は残ってない。正真正銘、正面突破で行くっ！」

僕の最後の策　それは策とは言えない真の特攻。捨て身の力ウンターアタックだ。防御や回避を頭から一切除外し、織斑君が僕を仕留めるより早く。彼を仕留める。機体のスペックやこれまでの戦闘経緯から考えればまず間違いなく無謀な手段だ。だが、なればこそ、相手の慢心を誘え、自身に覚悟を持たせる事が出来る。

「……ああ、いいぜ。全身全霊で、叩き潰してやる！」

そんな僕の言葉を虚言とは捉えず信じてくれた織斑君は、正面から受けて立つと言い、近接ブレードの刀身を縦に展開させ、そこから白い光刃を発生させる。

「れいらくびゃくや零落白夜　白式唯一の武器　雪片式型　の必殺技。この光の刃はシールドを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来るんだ。当たれば文字通り一撃必殺。その分エネルギーもバカみたいに食うんだけどな」

どこかニヒルな笑みを零しながら、数少ないと思われる手札を明かす織斑君。どうやら僕を誘っているらしい。『俺の首、獲れるものなら獲ってみろ』と

バカだな彼は……そんな挑発をされて、燃えない男がいるわけないじゃないか！

それに元よりこちらは背水の陣、相手の得物が大振りになる事だけ見れば、寧ろ僥倖とすら言えるだろう。

僕は左足を一步前に踏み出して突撃体制を取り、織斑君もまた自身の身体で雪片と呼ばれるブレードを隠し、間合いを悟られない様に

する居合いの構えを取る。両者の間で視線と行動だけで意思疎通がなされた瞬間である。

この張り詰めた。それでいて心地良い空気が
ゾクする。闘争本能が呼び起こされる。
たまらなくゾク

「勝負だっ！！」

互いに負けず劣らずの叫びと共にスラスタ―に火を灯し、一気に距離を詰める白刃の騎士（織斑君）と灰色の獣（僕）。

2機が接触するまでの時間は2秒程だが、極限まで集中力が高まった僕らには数十秒にも感じる体感時間だ。その遅々として一瞬の中で、僕はひたすら心を1つ所に向ける。ただ早く。織斑君が剣を振り下ろす前にこの最後の牙を彼の喉元に突き刺して仕留める。それだけで終わる。それだけが勝機。

だから灰狼よ。時代に取り残された旧世代機よ。今この瞬間だけ、スペックの限界を超えてみせる！！

勝利と言う名の餌^{えさ}を求める獣の様に！

ウオオオオオン！

沈みかけた夕日が辺りを茜色に染める中、IS学園保健室前の廊下で制服に身を包んだ一夏は簾らと共にたった今出てきた千冬を迎える。

「千冬姉。^{ちふゆねえ} どうだった佐藤は？」

「学校では織斑先生と呼べといつも言っているだろう織斑。^{のうしまたつ} 心配しなくても佐藤はただの打撲とスリ傷と脳震盪^{のうしんどう}だけだ。目が覚めればそのまま帰れるというお墨付きまで得ている」

「そっか……」

姉弟という関係が鼻肩を生んでいると思われない様に敢えて教師と生徒を引いた態度で弟に先程まで戦っていた対戦相手の具合を知らせる千冬。そんな彼女から佐藤に大事が無いのを聞いた一夏はホッと胸を撫で下ろし ようやく戦いの勝利を手放しに喜ぶ事が出来た。

「あんだだけ派手にグラウンドに叩きつけられてよくもまあそんだけで済んだわね……普通に死んだんじゃないかと思っただわ」

「怖い事言っなって鈴。まあ俺も今の今まで気が気じゃなかったけどさ……」

「まあ、最後は半ば自爆でしたものね……。零落白夜を発動させた白式に正面から挑むなんて……頭の検査を本格的になさった方がいいのかもしれないわね」

佐藤の立場からすればかなり散々な事を口にしながら数時間前の戦鬪の決着を思い返すセシリア。彼女たち観戦者の視点から見た決着は、ものの見事に順当。リーチやポテンシャルの差を全く考慮せずにつっ込んだ結果、白式の必殺技をモ口^{くち}に喰らい。一瞬でシールドエネルギーが0になったと同時に強制解除され、アリーナのグラ

ドと滑った末に壁に叩きつけられるという3段オチの惨敗だった。スポーツ競技とは言え1つ間違えれば試合でも充分に死ぬ可能性があるという事を実証したという観点からみれば、貴重な一戦と言えるかもしれないが、大半の女子生徒から見た印象は『佐藤、自爆乙（笑）』『ないし』『やっぱり織斑君ってカッコイイよね？』であつた。唯一の救いは今現在、散々な評価を受けている当の佐藤が夢の中で思春期特有のエロい夢を見てニヤ氣ヅラですやすやと眠っている事だろう……。

「佐藤には目が覚めるまで著莪が尽き沿うとのことだからお前たちはもう解散しろ。　　織斑はここで少し残れ、確認したい事がある」

その後も試合の様子について蛇足的に語りだす女生徒達に手を叩きながら解散を促し、一方で一夏を引き止める千冬。筈たちの算段としては、この後に一夏の祝勝会とばかりに4人で外で夕飯でもという考えもあつたが寮長にして未来のお義姉様になるかもしれない相手に逆らう訳にもいかず、せめて肩を並べるライバルたちと痛み分けであつただけ幸いと思いながら、若干の後ろ髪を引かれつつ、その場を後にする。

「で、千冬ね……織斑先生、俺に聞きたい事ってやっぱり……」

一方、当の一夏自身にも残された意味は薄々分かつていたようで、真剣な面持ちを彼女に向ける。

「ああ、織斑貴様……零落白夜のリミッターは自分で解除してないな？」

そしてその予測は質問の内容も含めピタリと的中。一夏は「ああ」

とハッキリと頷く。

「佐藤が最後の攻撃を宣言した段階で発動させた時は確かにいつも試合で使う時みたいな、セーブ状態だった。けど、佐藤のISが迫って来た時、何て言うのかな……何か黒くて大きな力の塊みたいなを感じた瞬間。白式が勝手にリミッターを解除したんだ。それだけじゃなくて何て言うのかな……漠然とだけど、声が聞こえた様な気がするんだ。『奴を討ち滅ぼせ』っていう」

「声だと？ 白式のか？」

「分かんないけど多分そう　で、気がついた時には反射的に佐藤に全開の零落白夜を叩き込んだ。……まるであの瞬間だけ白式に主導権を取られたみたいな感じだった」

どこか見ていた夢の内容を語る様な漠然とした口調であの試合の終幕を語る一夏。ISを操縦する経験はまだ数える程しかないが、それでも今回の様な事態がかなり異常なものである事はなんとほなしに感知する事が出来た。

IS（白式）がIS（灰狼）に対し、明確な敵意を向けるという異常事態を

「成程な……よく分かった。お前ももう帰って構わないぞ織斑。白式の異常に関してはこちらで調べるから預かっておく。この件に関してはあまり口外はするな」

「わ、分かった……」

どこか必要以上に冷静に、まるで『大した問題ではないからこれ以

上は考えるな』と暗に自分に言い聞かせる様な姉の言葉に戸惑いながらも、この姉の考えに間違いはないという信頼が勝ち、ガントレット（待機）状態になっている白式を渡す一夏。

そしてそのまま言われた通り男子寮へと帰っていく弟を見送った姉は、沈みかけた太陽を見ながらハア、と溜息を漏らす。

「『本来ISを保有していない筈の陸自の倉庫に封印されていた機体』と聞いた時、まさかとは思ったが……まさかこんな形で貴様と再会する事になるとはな……灰狼　いや、魔獣」
ジャバウオック

ジャバウオック　千冬がよく知る“彼女”が愛する『不思議な国のアリス』の中に出てくる詩に登場する黒き魔獣、白い騎士と相対し、互いに互いを討ち滅ぼし合う事を宿命づけられた存在。

そして10年前、白騎士（最初のIS）を生み出した稀代の天才篠ノ（の）の乃^{たはね}束^{たはね}の共同研究者であり、且つ彼女が唯一自分と同格の天才と認め、彼女が1人の男として愛し、その愛を拒んだ少年魔導士 金城 優^{かねしろ}ゆうが作りだした最初のIS。それが佐藤洋のISの正体なのだ。

「念入りに細工して機体を数段階劣化させる事で封印を施した様だが、格上（白式）相手に挑む乗り手（佐藤）の闘争心に呼応して目覚めたか……だとしたら厄介だな」

もしも彼女が　篠ノ乃　束が今もこの世界に魔獣が存在していると知れば間違いなく。それを操る佐藤すらも含め、本気で潰しに掛かるだろう。何故ならばその存在は彼女が頭の中で描く『不思議な夢の国』を終わらせる存在であり、束の想いに対する金城 優の『拒絶の証』でもあるからだ。

自分の思い描く世界の為ならば彼女は何処までも我儘に、わがまま 他を一切顧みずに動けるのだ。

だからこそ千冬はかつて彼女の親友であり続けた。相容れぬからこそ惹かれ合い、根本にどこかシンパシーを感じた彼女の傍にいた。交わる事はなくてもずっと隣にいる平行線のように。

だが、現状、今の彼女は束を止められない。今の彼女はどこまでいっても 導き手 でしかないのだ。

「ならば今の私に出来る事は 結局1つか」

壁にもたれかかりながら黄昏時の空を感慨深げな顔で見つめながら彼女は腹を決める。それは篠ノ乃 束の友としてではなく。1人の教育者としての覚悟。佐藤（教え子）を護る為の決意だ。

その為にはまず佐藤を『あの世界』に連れて行くのが1番だろう。かつて親に捨てられ間もない頃。財政難であった家計に置いて食費を浮かせる為に身を投じた弱肉強食の世界。心身を鍛え上げる場としてはこれ以上に無い環境だ。

「一夏との戦いで見せた無謀と紙一重の勇猛さ、判断力と決断力。その全ての根幹となっている勝利への執念 紛れもなく素質はある。後はお前次第だ佐藤」

狼 となり、魔獣を使いこなせるかどうかは

次回、【アイ・エス】のもう1つの世界が始まる

第3話 灰狼（アッシュフルフ）（後書き）

ハイ、前回の投稿が一週間ちょっとぶりです。

本職は郵便局員の仮面ライダーマンティスです。

と言う訳でやたら長くなりましたがIS主要キャラの登場から佐藤のISによる初戦闘まで一気に書かせて貰いました。

『長過ぎだバカ！』と仰る方、ごめんなさい。素直に謝ります。

佐藤のIS 灰狼、私の文章力ではイマイチイメージが湧かないという方もたくさんいると思いますがそこはおいおい人物・IS設定みたいなのを投稿して補完したいと思いますが、“通常時の戦闘能力”はハッキリ言って戦闘能力は打鉄などと大差ない代物ですマジで（笑）

作中最後でチラッとネタバレするその正体に関しては、近い内に明らかにする予定です。

でもって次回からは物語のもう1つの舞台『半額弁当争奪戦』も始まります。

ISキャラが半額弁当に命を懸けて挑むとか、そういうアホな展開もあるので楽しみに（笑）

それとちよつとだけアンケート的なモノをしたいのですが、今後作品に登場するベン・トーサイドのキャラで皆さんのご意見を窺いたいと思います。

（1）現状登場が確定してるキャラ（過去話含む）

・佐藤&著莪の変態親族の皆様

・佐藤の中学時代の残念な友人（石岡君、小口君、三沢君、加戸君など）及び広部さん

・佐藤の残念な寮仲間（内本君、霧島君、神田君、矢部君など）

・オルトロス姉妹（IS学園生徒会副会長ポジション）

・顎鬚、坊主、茶髪ら狼の面々や半額神

マッスルデカ
・筋肉刑事のキャラクター（作中ネット内のみ）

（2）検討中メンバー

・槍水姉妹

・井上あせび

・二階堂 連

・帝王

（3）現状では多分出さない予定のメンバー

・白梅梅

・白粉花

・その他全ての『ベン・トー』キャラ

というのが現状の私の考えなのですが、もしこのプランに意見がある場合は感想など言ってくれると嬉しいですよ。因みに佐藤を辱める白粉ポジションに関してはISサイドのあるキャラを変態化させ、佐藤をボコボコにする白梅ポジションには箒を当てようと思っています。

必ずご意見を反映させられるとは限りませんが、今後の参考にもなりますので、たくさんのご意見、お待ちしております！

第5話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）

<前編

お待たせしました。『アイ・エス』ベン・トーパート突入！
といっても実際はまだ闘わないけどね！（爆）

今回はIS学園に転校した佐藤の日常。という感じの話です。
前回の反省で前後編にしましたが、前編の時点で既に長いです。ご
めんなさい。

ベン・トーの文体を意識して書く文章がとんでもなく濃くなって
しまう……楽しいんですけどねw

第5話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）

<前編

需要と供給の交差点、誇りと空腹の狭間

全国のどこにでもある平和と日常の象徴たる大衆向け大規模小売店^{スーパーマーケット}は、ある瞬間、ある一定の場所で獣の咆哮が響き、人が飛び、血が流れる激しき戦場となる。

敗者には空腹と屈辱が、勝者には最上の実り、“神の恵み”が与えられる。現代の戦場で、今宵も獣たちは、己の資金と生活、誇りを懸けて狩り場を翔ける。

古くは、騎士。そして現代においては、人は彼らを 狼と呼ぶ。

女尊男卑社会の最前線たるIS学園に通うおよそ80名の男子生徒が学園生活は海兵隊員ばりに過酷且つ理不尽にして抗いようのない多くの不自由を強いられるがその中でも地味に、しかし日々の生活に置いて欠かせない問題となるのが夕食の確保であろう。

毎日の朝晩に於いて金にモノを言わせた一級食材と、一流のシェフと栄養士が多样且つハイグレードなメニューが待ち構える食堂が鎮座する女子寮と違い。男子寮の簡素な食堂はそのグレードやメニュー数などという話し以前の問題で、平日の朝のみしか開いておらず、

男子生徒たちは一日の勉学を終えた後の夕飯と休日に至っては3食に渡り、自身の力で糧を確保しなければならぬ事を意味する。

これは現在の社会風潮の果て、年々家事を専業とする主夫が増えた事を視野に入れ、若いうちから炊事の技術としつかりとした経済観念を持たせる。というのが学園の建前だが、要は『締めるところはどこまでも締める』という学校 国側の冷徹な処置と言えよう。

実際、1人暮らしの自炊なんて言うのは余程の知識と経験がなければ却って高くついてしまうものだ。

因みに噂の域を超えないがこう言った制度を置く事で男子生徒には慢性的な空腹・貧困状態に陥れる事で「穴があつたら突つ込みたい！」とか言っちゃうほど盛んな性衝動を抑制する為の措置 と言う話もある。

そついった過酷な食糧事情に対し、男子生徒たちの対応もまた千差万別だ。

実家からの送られる潤沢な仕送り（資金）にものを言わせて少し足を伸ばして外食に繰り出す者。

仲の良い数名の友人グループで集まり、当番制で夕飯を作る事により、資金や手間の解消を図る者たち。

赤字覚悟で趣味としての料理に没頭し、作り過ぎた分を割安で隣人に提供する者。

因みにこれは特殊な例だが『男子高校生に如何に潤沢な資金が必要か』と言う旨を切実に書き綴った手紙を父親に送り、仕送りのアッ

プを要求した某1年生Y・S君（操縦科所属）は数日後に『セミって食べるんだぜ？』という何故か半疑問形で書かれた一生必要のない知識が書きこまれた返事を送られたという切ないエピソードがあった事をここに残しておこう。

その中でも本校で2人しかいない織斑一夏の夕飯対策は王道にして特異。多くの男子生徒が心からそのシチュエーションを妄想しつつも無理と悟り、成し得た者に惜しみない憎悪の念を抱く。ラブコメのテンプレートイベント（お約束）

「ウス箒。いつも悪いな」

「あ、ああ……い、いや気にするな……こ、これも幼馴染で同門の義理……という奴だ……」

時刻は午後7時50分を少し回ったところで、男子寮と女子寮の丁度中間に位置するベンチの前で一夏は自分の姿を視認するや否や駆け足気味で風呂敷に包まれた重箱　その日の二人の夕餉ゆづけを手近づいてくる。

正式な待ち合わせは8時なのだが、彼女にとってはそんなのは問題ではなく。衝動的なものだ。

一部では『女殺し（レディ・キラー）』とも称される微笑みを向けられドモリながらも彼女は週に1度のこの時間がまた訪れた事に至上の悦びを感じる。何より嬉しいのはこの一時が『ライバルの介入を絶対に受けない』と保障されている事だ。

事の始まりはクラス代表対抗戦が終わって数日経過した際の大浴場

でのセシリア・鈴との会話中『男心を掴むには胃袋から』という話題が出た事だ。

彼ら共通の想い人である一夏はその家庭環境もあつてか同年代の中では非常に家事が出来る男であつたが本人の話によると1人分だけ作るのも味気ないということに入寮後はもっぱらカップ麺かコンビニ弁当・外食で済ませているという何とも有益な情報を事前に得ていた彼女たちは、『しょ、しょうがないから私が何か作ってきてあげるわよ！ 育ち盛りでそんなんじゃ、栄養とか偏っちゃうでしょ？』とかなんとか言つて差し入れをし、あわよくば通い妻的なポジションを確保しようと思つたのだがそうなる当然、同じ事を企てるライバルの存在が疎ましい。そこで協議を重ねた結果、『大浴場条約』が3人の中で締結されたのだ。

この条約の主な概要は『月曜日は箒。水曜日はセシリア。金曜日は鈴。それぞれが週1回、一夏に夕飯をさし入れる。それぞれが担当日以外で決して抜け駆けをしない事。逆に担当日、夕食中には絶対に介入しない。何らかの事情でその日都合がつかない場合は翌日（箒の場合なら火曜日）に繰り越される』といったものであり。彼女たちは通い妻という魅惑のポジションを妥協する事で、僅かな時間ではあるが一夏と確実に二人きりになれる時間を手にしたのだ。

リスクを避け、確実な実益を得る。恋する乙女はいつの世でも強^{したた}かだ。

そして水面下でそんな乙女の駆け引きが行われたことなど露知らない鈍い一夏は、そのおこぼれとして週3で女子の手作り弁当に扱われるという大変にリア充爆発しろな想いをしているのだ。全く以つてこれだからMFの主人公は……失礼。

とにかくそう言った経緯もあって若い男女は街灯が照らすベンチの下で、2人きりの野外ディナーを楽しんでいたのだ。

この日の筈の用意した弁当はおにぎりと手羽先の煮付けをメインに据えつつも、おひたしやつけもの・ダシ巻き卵などの和風のおかずで統一した栄養のバランス・ポリウム共に申し分の無く。ポットに入れた暖かい味噌汁やデザートとしてカットフルーツも鎮座し、付け入る隙がない。若い癖に健康志向な一夏の性格も把握したライオンナップだ。

「うん旨い！ 筈はいい嫁さんになれるな！」

天然ジゴロの常套句の様な使い古された殺し文句を言い、筈の顔を真つ赤にさせながら彼女の用意した弁当をモリモリ食べる一夏。実際彼女の料理は3人の中でも特にクオリティが高く。如何にも腹をすかせた育ち盛りの男子と言った勢いで若干多めに用意された3段重ねのお弁当をあった言う間に平らげる。その後、せめてもの感謝の意とばかりに一夏は近くにある自販機で2人分のお茶を購入し、食後の些細な談笑を始める。

それぞれのクラスで起きた出来事、いよいよ本格的になる実技訓練に関する話題。剣道の話題や他愛のない思ひ出話など。ささやかだが幸せな一時に、普段釣り上がった印象のある顔つき筈の表情も綻ぶ。

「そついや筈って確か佐藤と同じ3組だよな？ ちょっと気になる事があるんだけど……」

「む……何だ？ あの変態に何かされたのか？」

だが、その中で話題が先週転入してきたとある男子生徒の事になっ

た途端。彼女の顔にあからさまな嫌悪感が現れる。

『お前は何故2人の甘いひと時の中であんな変態の話を持ち出す！
？』

と一夏の胸倉を掴んで問いただしたくなるような衝動に、駆られる。

「変態って……いやさ、アイツって何か、寮や廊下で見かける度に生傷増やしてるみたいだけど、どうかしたのかなって思ってた……」

そんな箒の無言の怒りをなんとなく感じた一夏は少々怯えながらも尋ねる。あの模擬戦から一週間経過し、クラスの違う一夏と佐藤は寮以外では廊下で顔を合わせるか1組と3組合同の実技演習でしか顔を合わせないが、その度に彼の顔や身体には包帯や絆創膏が増えていて、心なしか痩せ細っていく雰囲気のみて取れたのだ。

加えてどういう訳か帰ってくるのがいつも22時から23時近くであり、聞けばここ一週間の夕飯はずっとどん兵衛かソイジョイと言った財布に優しいラインナップだという。

重ねて言うが若い割に健康に気を使うジジ臭い。且つ人の良い彼はそんな彼を心配し、佐藤と同じく3組で、しかもクラスの代表を務める箒に何か知っているか聞こうとしたのだ。

だが、佐藤の生傷について話題になった途端。箒は鏡と対面したガマ蛙のごとき不自然な脂汗を流し、表情を固める。

「ワ、私ハ何モ知ラナイゾ……」

「いや、その片言口調。知ってますって言ってるもんだぞ箒さん……」

痛々しい程に透けて見える狼狽っぷりを見せる筈に彼の王子様は容赦のないツツコミを入れる。すると彼女は『俺が犯人だって言う証拠でもあるのかよ!』と自分を追い詰める探偵や刑事に反論する。その時点でもう負け確定の犯人ばりの逆ギレ口調で言ってしまう。

「ほ、本当に知らないぞ私はっ！ 確かに教室では何度か佐藤の顔面に木刀を叩き込んだが、アレは奴が人と会話してる時に目を見ずにむ、胸の方を見て話したり『篠ノ乃って名字、呼び難いよね？ 仮に僕と結婚すれば佐藤 筈……うん、呼びやすいねハニー』とか身の毛のよだつ寝言をほざいたり、お、お前の事で『なあ、織斑君って実は男色家?』とか意味の分からん事を口にするからだ!」

「イヤイヤイヤ！ もう充分白状してるからね？ っていうか木刀で顔面って普通に大問題だろ……」

筈って、佐藤と関わりと俺に見せないキャラを見せるよな。

などと感心しながら佐藤の生傷の原因をこちらが問いただしすらせずに洗いざらい白状する筈に哀れみを含んだ視線を送る一夏。

「ま、まあその……アレだよ。確かに佐藤の発言にも多少問題あるのかもだし、アイツは頑丈そうだけど、クラスメイト相手何だからもうちょつと優しくしてあげてもいいんじゃないのか……？ 流石に木刀でっていうのは……」

「て、手はそれなりに抜いている！ そ、それに佐藤の生傷に関しては私じゃない！ 基本的にはビンタメインだからな!」

「ビンタメインって言いたいくつバリエーションがあるんだよ……。何となく初対面の時から思ったけど筈とセシリアってやっぱり佐藤

の事嫌いなのか？」

「好きとか嫌いの話ではない。変質者には警戒心を抱く。一般的な女子として当たり前前の感覚だ。そもそも　ん？」

どうして想い人との楽しい夜のデートで変態の話をしなくてはならないのかという憤りを感じながら会話をする中、篝の目には今まさに話題に出ていた変質者あらため佐藤洋とその従姉の著莪あやめがボロボロな出で立ちと疲れ切った顔で、スーパーのビニール袋とお湯が入っている様子のカップ麺を大事そうに抱えながら夜道を歩く姿が目映った。

「ん、どうしたんだ篝？　……　って佐藤、あやめ！　どうしたんだよその恰好！？」

急に固まった篝の視線の先に顔を向け、一夏もまた2人の姿を確認。例によって絆創膏と包帯だらけの佐藤は言うに及ばず、著莪までも生傷だらけであり、夜道で女の子がという様子は事件性すら感じるというのが一般的な感覚だろう。

「アレ、一夏に篝じゃん？　こんなトコで何やってんの？　逢引き？」

「あ、ああ合挽き！？」

「いや、挽き肉じゃないから」

サラッと放たれた一言に文字変換を間違える程動揺する篝。その軽快な口ぶりこそ相変わらずであるものの、いつもハツラツとしている普段の彼女からは想像できない程、今の著莪は疲れ切っていた様

子だ。

「あつ……もう5分だ。折角だしここで2人と一緒に食べよっか佐藤？」

「ああ、うん。そうだね……」

更に佐藤に至っては生気が殆どないといった様相であり、一夏は思わず往年の名作ゲーム『バイオハザード』に出現するゾンビを思い出す。しかし一応言葉は届いた様子であり、一夏と箒は占有していたベンチのスペースを融通し、右から著莪、佐藤、一夏、箒という横並びで、4人は夕餉を開始ないし再開する。

「いただきます」

両手の人差し指と中指に割り箸を挟んだ状態で手を合わせ、日本特有の食材や作ってくれた者への感謝の言葉を唱えながら、人類の叡智^{いち}の結晶たるカップ麺　その中でも五指に入る完成度を誇る名作『どん兵衛^{おにぎ}』の蓋を開け、ズズズ……と近年ストレートタイプに変化した麺を啜^{すす}る2人。

彼らの今日の夕飯はこのどん兵衛に加え、著莪は鉄板の鮭^{さけ}おにぎり、佐藤はゴボウのてんぷらをそれぞれビニール袋から取り出し、手に伝わる温もりと完成された和風ダシのツユの味わいで摩耗^{さく}しきつた心を癒^{なぐさ}めていった。

「な、なあ箒、俺が言うのも何だけどその……」

「あ、ああ、そうだな。よ、よかったら少しつままないか2人とも？　大分なくなってしまったが……」

自分達の隣で黙々（もくもく）とカップ麺^{めん}を啜り、いくらか生気を取り戻した様子でありながらもやはり尋常じゃない。といった様子の2人に残り少なくなった自分達のおかずが入った重箱を差し出す筈。正直、貴重な時間を邪魔された事に多少思う所はあるが、そんな些細な事を言っている場合ではないとすら感じるほど、2人の雰囲気は異様ですらあった。

「ああ、いや。いいっていいって！ デートの邪魔した上でそこまですぐはなれないよ。あたしらの事は気にしないで……まあ、野良犬……いや、『負け犬』が正しいか。そんなのが二匹その辺をうろついてる程度に思ってたよ」

だが、そんな筈の複雑な心境がこもった恵みを苦笑しがちに断る著我。佐藤相手ならいくらでもおかずの横どりや理不尽なたかりもする彼女だが、存外こういった雰囲気とか、乙女の心境には敏感なのだ。「いや、でも断るのもあれだし……」と未練がましそうな目で見る佐藤の口に残り一口になった鮭なしの鮭おにぎりをつつこみつ、残り半分となった佐藤のてんぷらを横取りし、さっぱりとした印象のあるどん兵衛のツユに油のうまみを追加させ、佐藤を涙目にさせる。

「ハア……今夜こそはいけるって思ったんだけどなあ。なんだよ大猪^{じし}って……結局今日も『犬』のままか……」

「著我は普通に寮の食堂があるんじゃないの？」

「あそこのラストオーダーは19時半で“時間”を待ってたら間に合わないんだよ……。つか、ここまで負けが続いて食堂なんか頼れるかつつの！ <狼^{おかみ}>になるまではゼッティーやめねーし、それまでだったら何日だってどん兵衛生活してやるっつの」

「また“トライ&エラー”？……けど、そうだな。僕も今日は何か……悔しかった。戦って負けるのはまあ、いやだけど納得出来るけど。大猪を前に何もできなかったのは、豚の蹂躪じゅうりゃんに対して何もできなかったのは、凄く悔しかった。どのみち他に選択肢はないけど……このままじゃ、終われない」

「……なあ、何の話をしてるのか出来れば話してくれるとありがたいんだけど……」

空腹くうぷくと屈辱くつじやくを拭い去る飢えた犬の様に一気に夕飯を食べ尽くした後、それぞれの胸中を述べると同時に 狩り に対しての決意を新たにする佐藤と著莪。互いの環境も、狩り場に向かう理由も違うが、2人の気持ちはいつもの様に、当たり前前の様に1つだった。

「“犬”だの“豚”だの“狼”だの、お前らは一体何の話をしているのだ？」

しかし、そんなある種の『2人の世界』に入る佐藤らを前について耐えかねて一夏はかねてから気になっていた日ごとに増える佐藤の怪我也含めて彼ら2人が一体何をしているのか？ その結果にどうしてボロボロになってカップ麺を啜すすっているのか？

著莪は気を遣って敢えて自分たちを無視する形で会話を進めてくれていたが、逆に彼らの全く実体が掴つかめない会話が気になって仕方がない。

「ん？ ああ、まあ何でもない何でもない。ちょっとだけ過激な難ムスゲーに挑戦してるだけ、デス様みたいな」

「デス様？」

「あー、ゴメン。分かりにくかったか……。まあなんつーの？ 心配はしないでよ。私たちも好きでやってる事だからさ。なっ、佐藤？」

そういつて今しがたゴボウ天入りのどん兵衛を完食した佐藤の腕を引っ張り、「じゃ、若い2人はごゆっくり」と言つてその場を去る著莪。ナチュラルな気遣いや相変わらず一般人には理解しづらいセガネタなど、普段通りとも見える様子だったが、やはりどこか肝心な話をはぐらかされたみたいで、一夏の中では疑問は更に大きくなる。

「『好きでやってる』でボロボロになる……。部活か何かかな？」

「いや、それはないだろう。あの二人は確か<ファミ部>とかいう一昔前のゲームを愛好する部だった筈だ。それにあの生傷……。生半可なスポーツであそこまでボロボロにはならないぞ？」

考えれば考えるほどに膨らむ疑問。最早2人の間には所謂男女のいい雰囲気などは微塵もなく。同級生が夜な夜な行っているらしい。謎の『難ゲー』の正体で頭がいっぱいだった。

「まさかのストリートファイト？ いや、それも微妙だよな……。うーん、分からねえな」

「いつそ尾けてみるというのはどうだ？ あまり気乗りする事ではないが、あの2人が万が一にも危険な事に関わっているなら止めねばならぬし」

「そうだよな……。よし、それじゃあ明日の放課後、佐藤たちの尾

行だ。あつ、でもいいのか第？ お前はお前で剣道部があるんじゃない……」

「私の事は心配するな。内容はどうあれお前と放課後一緒に居られるなら……じゃない！ が、学友の為だからな！」

疑問と心配、そして僅かな打算も含めながら、明日の予定を立て、その場はお開きとなった。

IS学園だろうと一般的な普通高だろうと関係なく。全ての学生がその若さに溢れた活力を取り戻す時間。人はそれを昼休みと言う。約4時間にも渡る授業を乗り越えた先にある。束の間の休息。女子たちは机を移動させて3人から10人単位の仲良しグループを形成して窓際の2列の追いやられる形で固まった少数の男子生徒の存在など歯牙にもかけず、童貞男子の「幻想をぶち壊す」女子トークに花を咲かせたり自作のお弁当や最近購入したお気に入り的小物などのさりげなくも熾烈な自慢合戦に繰り広げたりしており、クラスに僕も含めて10人程の男子は男子でグループを形成して放課後に予定しているプチ合コンの話をしている者たちやとっとと1人で食事を平らげ、授業で疲弊した頭を休める為といって机につっぷして寝たりしている。

なんつーか。まあ……ものの見事な隔絶っぷりだ。

恐らく一般的な共学の高校に通う男子高校生からすれば、僕らの事を「選り放題の勝ち組」「パラダイスの住民」などと誤解するだろうが、そんなことはない。やっぱり世の中、バランスというのが肝

心なのだ。どんな綺麗事を並べても少数民族は弾圧される。それが自然の摂理なのだ。愚かな事だとは思うが……

そして、そんな強者（女子）と弱者（男子）の存在によって2分化された教室で僕は何をしているかと言うと、無論、他の残念な負け犬とは一線を画し、4〜5人の可愛い女の子たちに囲まれて「佐藤君、私今日はちょっと作り過ぎちゃったんだけど、よかった少し食べてくれないかな？」とかわざとらしい事言ってサンドイッチを進めてくれるお嬢様っ娘や、「べ、別にアンタが口クなモノ食べてないから心配して……とかじゃないんだからね！ たまたま早起したからお弁当作って、たまたま作り過ぎちゃったからあげるだけなんだから！ はい、アーン」とかホントは料理が苦手なのに僕の為に無理してお弁当をつくってくれちゃうツンデレ娘たちの勢いに押され、「ハハッ、まいったな〜もうお腹いっぱいだよ」と苦笑していたりした。……………うん。まあ、嘘なんだけどね。

本日の僕の昼食は、コッペパンの間にツナとタマネギをマヨネーズで絡めた。所謂ツナサンド120円とパックのコーヒー牛乳100円 以上である。

無論、育ち盛りの高校生のランチとしてはあまりにボリュームが不足しているのは分かっているが、何もダイエットをしている訳ではない。

僕がこんな第3者から見れば涙を誘う昼食を取っているのには2つ理由がある。

1つは言わずもがなの財政面での問題。月3万という厳しい収入に加え、著我と行動を共にすると高確率でたかられる現状を考えて、僕が1日当たりで食費に工面できる額は昼・夜込みで500〜600円が精々なのだ。

故にこれだけ質素な昼食で耐え抜いたとしても夕飯に裂ける費用は基本300円前後で出せて400円。410円のジャンプコミックスすら購入できない額しか許されないのだ。

そして2つ目は “ 今夜の戦い ” に備えての準備の為だ。

1週間前、僕と著莪をあの世界へと導いた “ 彼女 ” の話では、あのフィールドお場に於いて、身体能力の高さや格闘技経験の有無以上に重要なのは、『意思の強さ』つまりは獲物への純粋な欲求。要するに空腹感らしいのだ。

聞かされた当初、これまでの15年間の経験で物事に於いて精神論に話が及ぶとロクな事がないと思っていた僕はその話を適当に流していたのだが、先週の木曜日、4度目の挑戦となったその日、それまでになく大敗を期した事で認識を改めた。あの日、あまりの空腹に耐えかねた僕は夕刻についついコンビニでアメリカサンドッグを購入してしまったのだ。やや甘めのパン生地に包まれたソーセージにうまみに心癒され満たされこそしたが、その満足感が逆に夕飯への情熱を削いでしまい。結果僕は、その夜ウィダーインゼリーしか受け付けられない程に強烈な一撃をボディに受け、それまでで1番惨めな夜を過ごしたのだ。

ただ負けるならいい。しかしその敗因が空腹に負けた己の弱さにあるというのはかなり堪えた。以来僕は、この寂しい昼食の後も、毅然とした態度で耐え、腹の中で暴れる気が勘と言う名の魔物と戦ってきたのだ。

全ては『戦いの時刻』に最大限の力を発揮する為に

だがそれもまずは最低限のエネルギーを摂取してから。僕はその日唯一の昼食であるツナサンドを包んでいたエロティカルな透明のラップを丁寧に剥がし、パクリ口に頬張る。

全体的にしんなりとしたパンに口の中で絡まるツナサラダの芸術的

な味わい。時折口の中を発生するシャリっというタマネギの触感がまた心地よく。ツナのうまみとマヨネーズの酸味は最早至高とすら呼べるレベル。

直径20cm程のそのツナサンドを僕はじっくりと咀嚼^{そしゃく}。ご飯は良^{まんぷくちゅうさつ}く噛んで食べる。皆幼い頃1度は母親から言われた格言だが、これはなかなか役に立つ知恵だ。良く噛む事で満腹中枢は刺激され、時間もかける事で食事の満足感が補える上にしっかりと消化される。まさに名言であると僕はこの言葉を生み出した顔も知らぬ人物に賛辞をおくりたい気分だ。

まあ、たった1つのパンを後生大事に10分以上の時間をかけて食べる男子高校生の様は、傍から見れば若干アレかもしれないが、今はみてくれより実を取るべきだろう。

「……………」

「ん？」

その様にして1口当たり30回という模範的な咀嚼をもってツナサンドを堪能している中、僕はふと、自分に向けられた視線に気づく。この1年3組のクラス代表にして僕を1日平均2.5回ひっぱたく黒髪の女武士・篠ノ乃だ。

いつも「殴^{なぐ}っていいか？」というホントはサラサラ答えを聞く気のない問いかけの後、時にビンタで、拳で、蹴^{けり}りで、木刀でと豊富な攻撃手段で僕をボコボコにしつつ、その度に揺れる豊かな乳房の動きをちゃっかり脳内録画する事で僕の中で痛み分けとしてきた彼女の睨^{にら}んでると思える鋭い視線。成程、そういう事か。

初対面から向けられた敵意に満ちた態度と幾度とない暴力と今の熱

視線から導き出される答えなど言うまでもない。 アイツど
うやら、僕に本気で惚れているようだ。

恐らくは熱烈な一目惚れ、一週間前の初対面時。僕のカッコ良さに一瞬にしてハートを射抜かれた彼女は当初、自分の中に芽生えた初めての感情に戸惑い^{とまど}。それ故にいついつけんとうな態度をとったり、胸の鼓動の正体がわからず、ついイライラして僕を木刀と撲殺しかけちゃったのだろう。だが、恐らく彼女ももう気付き始める筈だ。僕をひっぱたく度に生まれる胸の痛み、それに随伴してくる「佐藤君とスキンシップが出来た」という悦びに、だが今までの関係性を考えて素直になれない。さんざっぱらボコボコにしてしまった僕が自分を受け入れてくれるか不安で仕方がないのだろう。

ハハッ、バカだな篠ノ乃は。僕がちよつと殺されかけた位で君の事を嫌いになる訳ないじゃないか？ あの前父に育てられたんだぞ僕は？ 悪気なく殺されかける事なんて日常茶飯事なあの佐藤家で15年間暮らしてきたんだぞ？ 君の木刀の一撃くらい、親父のトヨタカローラの一撃に比べれば軽いもんさ。さあ、今こそ勇気を出して言うんだ。怖いかもしれない。しかし恐れるばかりでは2人の関係は縮まらない。勇気を出して、こう言うんだ！

「いつまで食べている？ もう予鈴は鳴ったぞ？」

「そう。『いつまで食べて 』ってえ……？」

気がつくとも目の前に今しがたまで僕に熱い視線を送っていた篠ノ乃が目の前に立っており、さりげなく黒板横に備え付けられた時計を見て見れば、彼女の言う様に昼休みは終わりをづけ、後数分で5時間目の授業が始まるという所まで来ていた。おかしい、僕の中の感覚と40分以上の時差がある。

僕は未だ3分の1程残ったツナサンドを持ったまま、頭を抱えた。

「タイムリープ……いや、この場合キングクリームゾン……ボスか！？」

「全くもって意味が分からんのだが、とりあえずその大事そうに持っているパンを食べるなりしまうなりしたらどうだ？」

僕の小粋なジョジョネタにも気付かず、冷たいツツコミを入れながらその豊満な乳房を乗せる様に腕を組む篠ノ乃。何だ？　僕を誘っているんじゃないのか？

少し勿体ないが彼女の言う様に時間もないので残りのパンを一気に口に突っ込みコーヒー牛乳で流し込むという張り込み中の刑事の様な食べ方で昼食を終えた僕は思考を再び彼女の方に向ける。少し気恥ずかしいがやはりここは男から動くべきだろう。

「あ、ああうん、そうだね……ところで篠ノ乃、ちょっと聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「な、何だ……？」

「結婚式は和風と洋風、どっちがいいかな？」

「……………は？」

やはり彼女のキャラクターを考えるなら神社で挙げるのが妥当なのかもしれないが、ウェディングドレスに憧れない女子はいないとも聞く。僕としてはどちらでも構わないので彼女の意向を優先させる方向で話を進めたい。……けど、その後の『夜のひと時』に関しては妥協しないぜベイビー？　フフ

「……………佐藤。その問いかけに答える前に私の質問に1つ答えてくれないだろうか？」

と、僕の間接的且つ小粋な口説き文句にしばし固まっていた篠ノ乃だった。だが、やがて何故か冷たい印象を受ける微笑みを僕に向けながらロッカーから何故か木刀を取りだし、僕に質問を返す。アレだろうか？「子供は何人欲しい？」という思春期男子の耳には何故かエロく聞こえる微笑ましい質問だろうか？ハハ、せっかちな僕の手は。

「分かった。何でも聞いてくれて構わないよ？」

僕はいつも以上に爽やかな笑顔を彼女に向け、右手で髪の毛をかきあげるポーズ決めちゃったりする。すると彼女はニコッと笑みを作った後、僕に尋ねた。

「そうか。では遠慮なく聞こう。遺言はあるか？」

「え……………」

気がつくと僕は、何故か数時間後の保健室のベッドの中で眠っており、昼休みの記憶の大半を失っていた。

入学してから度々お世話になっている保健室のベッドから起き上がると、そこには眼鏡をかけた小太りのクラスメイト うちもひろあき 内本宏明 君

があり、僕が気を失っていた間に終わった5・6時限目の授業ノートのコピーを渡してくれた。何ともありがたい心遣いだ。

内本君は整備課1年の中でもトップクラスに優秀な生徒で有り、優秀な技術と女子生徒からどんなに無茶な要求をされても……否、その注文が無茶であればある程モチベーションを上げ、必ず応える職人肌として教師陣からの評価も高いのだが、それら全ては彼の隠された性癖に起因するものであるという事は、余り知られていない。

『実は俺もMなんだ』

これは転校初日、僕が軽いアメリカンジョークをかました結果、篠ノ乃にぶつ飛ばされた際、起き上がるのに腕をかして貰った最中で言われた全く嬉しくないカミングアウトだ。

そう。何を隠そう彼は真正正銘、真性のマゾヒストであり、年齢15で自らの性癖を自覚し受け入れた猛者^{もて}なのだ。女子生徒からの無茶な注文も彼にとってはご褒美以外何者でもなく。本人によれば元々ISへの興味はないのだが、入学すれば男子は100%虐げられるという理由だけでとんでもない倍率のIS学園の入試を突破したらしい。

それはまあ、いい。

人の性癖なんてそれぞれだし、彼がどんな状況に悦びを感じようが、その結果として破滅しようが知ったこっちゃない。しかし問題は、彼が僕の事を『同士』として認識している事だ。連日に渡り篠ノ乃にぶちのめされてる僕を見て『クラス1のS系美人に果敢^{かかん}に挑んではご褒美を貰うアクティブM』として彼並びにその背後に入る集団Mの騎士団 からも一目置かれる存在になってしまったのだ。

全く……君らの様な変態と一緒にしないでくれ！　と言いたい気分だ。おかげで僕は初日の警備隊との一戦もあってクラスでは露出^{ろしゅつ}狂^{きやう}という不当にして不名誉なレッテルを貼られていて困っているのにその上でDM疑惑とか、勘弁してほしい。

そんな内本君に「全く真昼間っから見せつけてくれるよな兄弟はこのこの」という冷やかしをうけながら僕は保健室を出て、一旦誰もいない教室に戻って鞆を回収した後に本校舎から少し離れた部室棟へと向かった。

『戦い』が始まる夜8時まではそこで著我と時間を潰すのが僕の放課後の日課なのだ。

ISの技術を学ぶ専門機関と銘打ってる当学園だが、あくまで教育機関である事に派変わり無く。当然放課後には多数の生徒が部活動で青春の汗やら何やらを流しており、天下無敵の国立高である本校は無論、そういった面でもバリバリに力とお金をかけていたりする。

エレベーターから冷暖房完備。申請すれば3人から部として認められ、教室と同規模の部室があてがわれ、設備も充実した部室棟の5階。僕と著我が所属する　ファミリーコンピューター部。略してファミ部の部室がある。

中に入るとそこには絨毯が敷き詰められた20畳ほどの部屋があり、その恥にある大型モニターの前でSFコミ^{スーパーファミコン}ソフト『ドラゴ　ボールZ　（スーパー武闘伝）』に興じる著我ともう1人の女子、ファッシュンなのかサイズが合っていないのかは不明だが袖が不自然に長い制服を着た眠そうなトロンとした目元の女の子　布仏^{のほとけ}　本音^{ほんね}　の姿が合った。

彼女は織斑君と同じ1組の生徒であり、ファミ部に所属すると同時に生徒会の書記でもあったりする整備課の女子だ。見た目通りどこかのんびりとした性格で間延びした喋り方をする。のほほんとして印象を感じる女の子だが、本人曰く優等生らしい。

そして信じ難い事だが、このファミ部に所属する5人の部員の内、何と僕と著莪を除く3人が生徒会の役員だったりするのだ。

副部長は生徒会長でもあり、学生の身でありながら『ロシアの現役代表操縦者』でもある2年の 更識 楯無 先輩で、部長は会計であり、布仏の姉でもある3年生の 布仏 虚 先輩。何でも年中多忙な生徒会のメンバーが校則にある『生徒は必ず何らかの部・同好会に所属しなければならない』というのを何とか守る為に作った部というのがこのファミ部のそもその始まりらしい。

その為、今は布仏こそ来ているものの、基本的に生徒会メンバーの出席率は悪く。僕と著莪だけで延々とバーチャに興じて部活を終えるという。ぶっちゃけ実家に入る時と何ら変わらない日も決して珍しくないのだ。

「やった〜5連勝〜 あ〜ヨ〜ヨ〜来てたんだ〜。ち〜っす！」

「遅かったじゃん。何かあった？」

「詳しくは記憶が曖昧で覚えてないんだけど、ちよつと篠ノ乃にぶつとばされて昼休みからさっきまで保健室で寝てたんだ……」

「何だ日課か。よし、それじゃあバーチャやろうぜバーチャ！ やっぱセガ以外じゃ本音に勝てないよ〜」

「日課ちゃうわ！ 従弟がさっきまで保健室にいたって聞いて感想それだけ？ しかも『そんな事より』的な感じであっさり内容変え

てるし。ちよつとは優しい言葉の1つもかけるよ……」

「えゝ……あー、ゴメン。無理。考えるのも面倒臭いや」

「さいですか……。けど僕もちよつと無理。クラスの友達から借りた5・6時限目のノート写さなきゃいけないから。終わってからな」

そう言つて僕は部室の中央にあるちゃぶ台に座り自分のノートと貰ったコピーを広げて書き写し始めた。遊ぶにしても面倒事は早めに片づけるに越した事はない。そして僕が誘いを断ると著莪は「えゝ」とわざとらしい不満の声を上げながらも再び画面上でピコ口の操作を始める。因みに相手をしている布仏はゲーマーとして相当の実力者であり、セガハードならこちらに分があるが、僕も著莪もそれ以外だと中々勝てない。

というかぶっちゃけ、現在のこの部のメンバーは全体的にハイレベルなゲーマーばかりであり、世間からは娯楽系のゆるい部活と思われがちだが、実際には『髭を生やした某配管工』が亀に攫さらわれたお姫様を救うゲームにハマっているマリタな部長を筆頭に、20世紀の遺物として扱われる往年のレトロなゲームを愛して止まないメンバーで構成されている。結構な体育系部活なのだ。無論、部室には歴代のセガハードは勿論、一通りのハードは揃そろっている。

そんな部室でゲームないし授業の予習復習何かを済ませながら来るべき『狩り』の時間を待つのが今では僕と著莪の日課となっており、18時半頃。一応の部活終了時刻に布仏が帰ってからもしばし2人でバーチャ2に興じた後の19時半。僕と著莪は決意を胸に、戦場せんじょうへと赴おもむく。

今日こそは絶対になつてやる

狼に！

「お、佐藤達が出て来た。行くぞ箒！」

「あ、ああ……（今回はかなり本気で打ち込んだのにピンピンしてる……あの男、本当に人間なのか？）」

女子寮にある食堂の閉店時刻もあり、殆どの生徒が帰宅して静まり返った部室棟から出てきた黒髪と金髪の男女　　佐藤と著莪を遠巻きに視認した一夏は、当初の予定通り。2人が毎晩何をやってあかもボロボロになっているのか知る為の尾行を開始。内心で数時間前木刀で保険室送りにした佐藤がピンピンしている事にドン引きしている箒と共に、付かず離れずの距離を保ちながら2人の背中を追いかける。

本人たちにしてみればかなり真剣なものではあるが所詮は素人の高校生。お粗末極まりない尾行。しかしその対象は対象で自分たちが尾けられているなどと夢にも思わない高校生。そんなお粗末な尾行にも全く気付かず、談笑しながら学園敷地内の外を出て10分ほど歩く。

そこにあつたのは大型のスーパー。食料品から生活雑貨・消耗品に至るまで、ある程度のあらゆる品物が、メーカー希望小売価格より優しい値段で売られている愛すべき庶民の味方　大衆向け大規模小売店だ。

「ここがああ2人の目的地……か？」

「バカを言うな。一体どこの世界にスーパーに言っただろボロボロになる奴がいる。……何か買物してから別の場所に向かうのだろう多分」

てつきり夜の町のアウトロー達が巣くう場所にでも向かうのじゃないかと思っていた一夏は思いもよらず到着地に首を傾げながらも、箒の仮説にひとまず納得。確かにこの平和の象徴の様な場所であるに傷だらけになるなどありえない話だ。

恐らくは飲み物が簡単に腹の足しになるものでも買ってスグ出るに違いない。

そう思いながら佐藤達を視認できるギリギリの距離を保ちつつ、目立たない様に普通に買物にきた一般客の様に買う気のない商品に目を向ける。因みに今いるのは鮮魚コーナーの前だ。リピート再生を続ける おさかな天国 が心を癒す。

「へえ、この辺のスーパーには初めて来たけど結構品揃えがいんだな。しかも値段もお手頃……ん。どうかしたか箒？」

IS学園入学まで家事の一切を受け持っていた主夫中学生でもあった一夏は、閉店も迫る時間で一通りの商品が無くなってこそいるが、残された魚の品質や値段を見て、このスーパーのグレードの高さを垣間見る。一方、箒は箒でどこか嬉しそうに、ほんのり頬を赤らめていたりした。

「いや、こうして2人並んでスーパーで品物を物色するというのはその……（夫婦みたいで）いいものだな。などとな……」

「そ、そうなのか？」

今時の女子の間ではスーパーが人気のレジャースポットなのだろうか？ などと言う荒唐無稽な想像をしながらも、一夏は首を傾げる。

そんなこんなで待つこと数分。

本来の目的地に向かう前の買い物と踏んでいた一夏らは当初、佐藤達がちゃっちゃと買い物済ませるだろうと思っていたのだ、どういう訳か彼らは精肉コーナーで立ち止まり、まるで芸術品を眺めるかの様に赤と白のコントラストが美しい。角煮用豚バラ肉をジツと見つめていおり、未だにその場から動く気配がない。

「……まさか今日は例の傷云々の用事がなく。ただ2人で作る夕飯の材料を買いに來ただけというオチじゃないだろうな？」

「どうだろうな……けど、何だろうあの2人。確かにずっとあの場所から動かないけど、なんていうか……意識を別の所に向けているというか。“何かを待ってる”って感じがするんだけど気のせいかな？」

「む、言われてみれば確かに……」

一見して極々普通の買い物客に見えるが、ジツと観察してみればどこか不自然な佐藤らの違和感に気づく一夏。そして視野を広げると、そういった不自然さを放つ客が2人だけでない事に気がついた。

お菓子コーナーで新作のスナック菓子を掴みながら裏面の成分表示に目をやる坊主頭の高校生。乾物かんぶつコーナーにあるスティックタイプの粉寒天に目をやるロンゲにピアス、顎髭あごひげを生やしたちよつとホストっぽい雰囲気ふんいきの男など。下は中学生くらいくらいの女子から高校生、大

学生、仕事帰りのサラリーマンなど10代後半から20代半ば位の男女がよくよく観察してみるとただ買物に來た風を装つて（・・・・・・・）その場から1歩も動いていない。まるで万引きGメンの样でもあるが、ものふそれにしても雰囲氣が妙だ。まるでこれから戦いに身を投じる武士の样である。というのは幕の感想だ。

「アレ？ あそこにいるのって確か……」

「ん？ ああ、さらしき更識かんざし簪。4組のクラス代表だな」

そして、そう言った佐藤らも含む“不思議な客”を観察している内に、一夏の目には自分たちと同じIS学園の制服に身を包んだ。見知った1人の少女の姿が映った。

彼女の名は更識 簪。生徒会長である更識 楯無の1つ下の妹であり、日本の代表候補生で4組のクラス代表でもある眼鏡をかけた内向的な印象の少女だ。4月と5月のクラス代表同士の定例会議で顔を合わせ、2、3度会話をした程度の間柄だが、それでも知人には違いない。そんな彼女もまた、この閉店間際の静かなスーパーでは『迷彩柄の異彩』を放つ存在だった。

ただ、その異彩つぷりは佐藤ら 何かを待つ者 としてではなく。寧ろ一夏や筈らと同様の 観察する者 としてのものだつた。それも彼女は、2人にとつて当初の追跡対象である佐藤らに目を向けながら時折メモをしている。最早一般客の擬態ぎたいすらしていない。

これはひょつとしてこの不可思議な空間の謎を解く重要人物なのではないか？　そう判断するや否や二人は缶詰コーナーに身を潜めながら佐藤を観察する彼女にコンタクトを取る。

「よう更識。お前も買い物……って訳じゃなさそうだな？」

「織斑君に……篠ノ乃さん？」

「突然すまない更識さん。実は聞きたい事があるんだ」

突然自分の名前を呼ばれた事に一瞬驚きの表情を見せるもスグにいつもの感情を無機質とすら言える表情を整え「何？」と淡泊に尋ねる。

一夏はそんな彼女の雰囲気になんぞ若干圧倒されながらも友人の佐藤と著莪のここ数日、生傷を増やしながら夜な夜などこかへ出かけている事。気になって後を追ったら行きついた先が何故かスーパ―でこの異様な雰囲気になんぞ戸惑っていた所、事情に精通した知人「簪を見つければ、声をかけたという経緯をかいつまんで説明した。」

すると彼女は「成程。知らずに迷い込んだ一般人と言う事ね……」と、一夏たちに観察するような視線を見せた後「違法コロシウムを捜査中、サイトーは偶然高校時代の友人が巻き込まれた事を知り、逃がそうとした所で正体がバレ、彼らを人質に取られてしまう。解放の条件は自身の肉体をコロシウムのボスに捧^{ささ}げる事。肥^こえ太^{ふと}った脂ギッシュなメタボボディが迫る……使えるか」と、理解不能な独り言をつぶやいた後、答える。

「説明をするのは簡単だけど、ただ聞いただけじゃきつと貴方達は納得できないと思う。多分私の事を頭のおかしい人を見る様な目で見る……それはイヤ」

「いや、そんな目で見たりしない。約束する。何を言われても更識の事を信じるよ」

「ああ、約束しよう。だから教えてくれ更識さん。ここでいったい

これから何がおころうとしているんだ？」

グツと拳を作りながら『お前を信じるぜ』的な事をどうどうという
一夏。流石主人公。

実際自身でもこの至って普通のスーパーマーケットにおいて異様と
言える空気は感じている。その正体がなんであれ、そんなバカなと
切り捨てたりはしない。その自信はあった。

だが……

「そこまで言うなら……教える。サイトー……じゃなかった佐
藤君たちは、待ってるの、間もなく姿を現す今日の“獲物”をね。
そしてここにいる不自然なお客は全員。それを奪い合う為に集い戦
う。ライバルたち」

「戦って奪い合う？　こんな閉店間際の至って平凡なスーパーで一
体何を！？」

「閉店間際だから”生まれる物を奪い合うの……それは飽食の時
代が生んだ奇跡の果実。需要と供給のクロスポイントに生じた僅か
なズレが産み落とす極狭のフィールドにのみ実る獣たちの糧」
即ち、半額弁当。サイト……佐藤君達が挑むのは、半額弁当
争奪戦」

「……はい？」

一夏と筈の時が、止まった。

「……嘘つき」

後編へ続く！

第5話 誇りと空腹の大衆向け大規模小売店（スーパーマーケット）

<前編

てな訳で次回に続く！

そして簪ファンの人、いたらゴメンなさい（orz）

作品をより愉快的ことにする為、彼女にはクリーチャー（化け物）
になってもらうことにしました！

これからサイトー……佐藤がどんな目に逢うか。ベン・トー好きな
皆さんはお分かり……ですよね？

同情するなら次回も見てね！（爆）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563y/>

アイ・エス

2011年11月27日18時36分発行